

認定特定非営利活動法人 Cloud JAPAN
2023 年度 活動報告書

令和6年3月31日



認定特定非営利活動法人 Cloud JAPAN
代表理事 田中 惇敏

mail. info@cloud-japan.org
tel. 0226-29-6514
fax.0226-25-7523



目 次

1. ソーシャルアントレプレナーが集う場づくり支援事業
 - 1.1 気仙沼子育てコレクティブインパクトプラットフォーム”コソダテノミカタ”
 - 1.2 建築ストック活用の民衆化を目指した支援の研究
 - 1.3 能登半島地震支援活動
2. ソーシャルアントレプレナーが集う場の運営支援事業
 - 2.1 気仙沼市ふるさとワーキングホリデー
3. ソーシャルアントレプレナーの資金調達支援事業
 - 3.1 みんなのたんす
4. 地域で活動するソーシャルアントレプレナーに係る情報発信事業
 - 4.1 講演活動
 - 4.2 関係人口再考
5. ソーシャルアントレプレナーの育成及び事業促進の教育支援事業
 - 5.1 錦江町ゲストハウス Yorodde
 - 5.2 愛媛県伊予市ふるさとワーキングホリデー
6. 運営組織
7. 収支報告
 - 7.1 2023年度活動計算書
 - 7.2 事業別損益の状況
8. 終わりに



1. ソーシャルアントレプレナーが集う場づくり支援事業

本事業では、全国のソーシャルアントレプレナー（認定 NPO 法人 Cloud JAPAN では「誰かのために何かをする喜びを楽しんでいる人たち」と定義する）が地域貢献する上での活動を支援している。

2023 年度は新型コロナウイルスの影響も落ち着きつつあり、実際に全国に足を運び支援することができた。能登半島沖の復興支援に向けた取り組みなどこれまでの知見を生かした活動の展開もできてきている。

また、活動拠点のある宮城県気仙沼市における社会課題解決にフォーカスをあて、コロナ禍が落ち着くまでに集中的に支援を行った 3 カ年計画の最終年度として、新たな課題解決モデルの提案を完遂した。

研究事業では、本年度もジャーナル論文公開など、一定の成果を上げることができたと考えている。今後も実践研究からビジョン達成に向けた歩みを着実に進めていく。



1.1 気仙沼子育てコレクティブインパクトプラットフォーム”コソダテノミカタ”

1.1.1 活動背景

震災前、気仙沼市は官民保育施設や児童館も多くあり待機児童数は0人だった。気仙沼市及び近隣被災地は三世帯世帯が多く、地域コミュニティにより助け合いながら子育てができるまちであった。幼少期の子どもたちは自然や公園など遊ぶ場所が豊富にあり、親同士、子ども同士のコミュニティも密にあった。

震災の直接的な被災状況として、保育関連施設 30 施設中 7 施設が津波による被害を受けた。その後、復興の過程において、住居流失を起因とする世帯分離・核家族化の進行、住宅再建資金確保のための共働き増加、復興特需によって職業選択の自由度が高まったことによる母親の就労機会の増加（女性の社会進出）、子守りを任せられていた祖父母も定年延長等が発生した。

1.1.2 課題設定

●震災後希薄になった子育て・子育てコミュニティの再生

震災後の祖父母世帯の減少 (40~70 代犠牲率 65.3%)

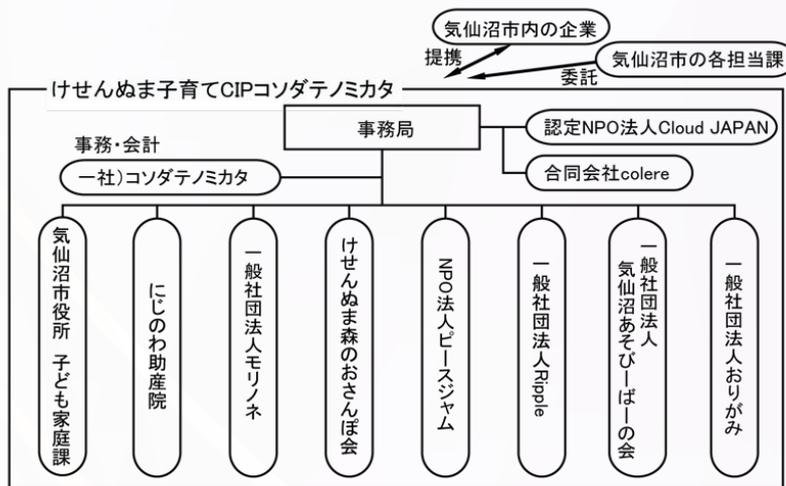
地域コミュニティの変化 (定住期間 5 年未満の世帯震災前 14.1% →震災後 28.2%)

●産みにくい、育ちににくい市内の環境改善

合計特殊出生率の低下 (2011 年 1.49 → 2019 年 1.16)

●夫婦の子どもの産む数の減少 (子どもがいない又は 1 人の夫婦が 75.9%。県内でワースト 3 番目)

1.1.3 昨年度末の協働団体と体制



各団体から令和 6 年 5 月 9 日時点で 43 名が参加

主要な連携団体・個人として、市内児童館 5 箇所及び支援センター 2 箇所、唐桑保育所、かやのみ保育所、内の協保育所、人口減少対策統括官、健康増進課、産業部産業戦略課、震災復興企画課、秘書広報課、慶應義塾大学井庭崇研究会、市内外各企業・団体・店舗 (気仙沼市青年会議所、イオン東北 (株))

イオン気仙沼店,さんかく,ネットワークオレンジ,vif nail,鍼灸サロン YOH, EASEBELLE,みやぎ生協,ファミリー歯科,HappySmile ヨガ,自然卵のクレープ,いずみぱん,Harrys Junction,サンスマイル,舞根キッチン,cheers,喫茶ぼん,紫神社前商店街,かもめ通り商店街),三陸新報社がある。

1.1.4 昨年度の活動内容

1.1.4.1. 政策提言

【量的実施結果】

新たに「第二子無償化の一時預かりへの拡大」「母子手帳の気仙沼独自デザイン」「4ヶ月健診後の情報提供への民間参入」など提言した内容が政策立案された。

【質的实施結果】

既に左記の重要な政策が形成され、かつ、今後もみらい人口会議からのアウトプットに市内の子育て環境改善に資する施策が公開される予定。

1.1.4.2. 子育て団体連携企画

【量的実施結果】

- ・一時預かり事業 1,101 名
- ・屋外活用事業 合計 1,247 組
 - 森のおさんぽ会 821 人
 - プレーパーク気仙沼 426 人
- ・助産院事業 189 名
- ・コミュニティ形成事業 1,380 組
- ・カフェ事業：999 組
- ・森のようちえん事業：545 組

【質的实施結果】

助産院事業、カフェ事業については毎月安定して新規の利用があり、近隣地域からの利用も多かった。森のようちえん事業については上半期に比べると各月の利用者は約2倍となっており今後も引き続き利用者が増えていくと思われる。

1.1.4.3. 連携プロジェクトに関する活動実施

【量的実施結果】

- ・10/9「けせんぬま子育て応援フェスタ」開催 700 人来場
- ・連携企画開催：29 回 162 組

【質的实施結果】

10/9にプレパパママ(妊婦)も対象に「子育て応援フェスタ」を開催。雨天にも関わらず700人以上の来場があった。また同時開催の「妊産婦スタンプラリー」では合計57人(妊婦30人,産婦10人,夫17人)の参加があり、多くの妊産婦が子育て支援に繋がれるきっかけとなった。

1.1.4.4. 子育て団体の持続支援

【量的実施結果】

- ・子ども・子育て支援交付金(令和5年度)
一般社団法人モリノネ約569万円(見込み)



- ・令和6年度子育て支援市民交流ワーキング運営業務委託(令和6年度4月より)

一般社団法人コソダテノミカタ 1,253万円

【質的实施結果】

モリノネが一時預かり事業で子ども・子育て支援交付金を受託。

一般社団法人コソダテノミカタが令和6年度より子育て支援市民交流ワーキング運営業務を受託予定。

1.1.4.5. 個別伴走支援の実施

【量的実施結果】

- ・令和5年3月一般社団法人コソダテノミカタを設立。
- ・コソダテノミカタメンバーによる新規チャレンジ

川村：子ども向けお菓子教室の開催1回

阿部：家族写真撮影イベント開催3回

【質的实施結果】

・事務局法人として一般社団法人コソダテノミカタを設立。また気仙沼市からの事業受託に向けても子ども家庭課と連携を進め、令和6年度の受託が決定。昨年度をもって弊法人(認定NPO法人Cloud JAPAN)による事務局業務を移行する。

・任意団体については団体設立は無かったもののママメンバーから新たなチャレンジが生まれた。

1.1.4.6. 知見の共有

【量的実施結果】

- ・論文掲載

地域デザイン学会に査読つき研究ノートとして掲載

- ・メディア掲載

新聞：三陸新報13回

テレビ：K-net 出演2回

【質的实施結果】

得られた知見が学会に発表され、MINATOによる子育て世代向け移住支援プログラムが開始されたので上の評価とする。

1.1.4.7. 保育士人材獲得

【量的実施結果】

- ・保育士版ふるさとワーホリ参加者14名(うち移住者2名)
- ・市内保育資格取得支援 令和6年度受験希望者4名
- ・潜在保育士さんとのお話し会開催1回7名参加
- ・現役保育士さんとのお話し会開催1回14名参加
- ・市内全保育士対象アンケート調査予定

【質的实施結果】

・保育人材確保を目的に保育士版ふるさとワーホリと連携。参加者受け入れを行い2名が移住した。

・今年度は保育士試験を受けた者はいなかったが引き続き受験希望者の取得支援も進めていく。



・ 保育環境の処遇改善に向けては市内の潜在・現役保育士との意見交換会を実施した。また保育士一人一人の詳細な声を集めるためにアンケート調査を実施予定。アンケート内容の検討を行った。(令和6年度実施予定)

以上、受益者数合計：(11,343)名

内訳…未就学児(5,128)名 年長～小学生(1,748)名 子育てママ・パパ(4,393)名 行政職員(74)名

1.1.5 受益者からの声

●活動報告会参加者アンケートより

・ 6月に2人目を出産予定で、また新しい家族の形になって子育てをしていく不安もありますが、気仙沼市の子育てをよくしていこう！と、まち全体でこんなに想ってくれてる方々がいると思えるだけで、このまちで子育てしていくことへの希望を感じました。コソダテノミカタさんの活動で救われている、私のようなママ達が沢山いると思います。

・ SNSでの情報発信もそうだし、フェスのような大きなイベントもそうだし、私達の手元に届きやすいようにちゃんと寄り添おうとしてくれて、安心感をもって接してくれる姿がすごく伝わってます。

●保育ワーホリ参加者受け入れの保育施設の所長先生より

・ ワーホリの方が来てくれて助けて頂き、忙しい時間帯なので助かった。人手があり普段できない遊びができて現場の先生からも「今日楽しかった」「今日良かった」などの声が聞かれました。



1.2 建築ストック活用の民衆化を目指した支援の研究

本年度は、以下の通り、ジャーナル論文や学会に研究成果を発表することに重点を置いた。

1.2.1 創造的なプロセスの理論研究

研究結果を以下の通り投稿した。報告書作成時点において公開されていないため詳細は控えさせて頂く。

【タイトル】

多様な主体の参画による子育て拠点の創造プロセス

【著者】

田中 惇敏、鶴飼修

【投稿先学会】

都市住宅学会、123号

1.2.2 関係人口創出に関する研究

気仙沼市のふるさとワーキングホリデーの参加者を対象に、再訪する関係人口を半構造化インタビューをもとに SCAT 分析にて理論化した。その上で、アクションリサーチとして取りまとめて学会発表した。

【タイトル】

再訪型関係人口創出に向けたアクションリサーチ
- 宮城県気仙沼市におけるふるさとワーキングホリデー事業 -

【著者】

田中 惇敏・西村 歩・木原 葵・赤坂 勇磨・建石 大貴・井庭 崇

【発表学会】

日本都市計画学会 2023 年度東北支部発表研究会
2024 年 3 月 10 日@東北大学災害科学国際研究所

1.2.2.1. 背景と目的

1.2.2.1-1. 研究の背景

近年、我が国では地域再生の担い手として地方の外から貢献する「関係人口」の重要性が主張されている。関係人口としての関わりの深さは、活動内容や訪問の有無などによって定義されてきており、中央省庁や地方自治体においても関係人口創出の取り組みに対する議論が活発に行われている¹⁾。総務省は、関係人口創出事業として「都市部の人たちが一定期間地方に滞在し、働いて収入を得ながら、地域住民との交流や学びの場などを通じて地域での暮らしを体感する」制度²⁾である「ふるさとワーキングホリデー事業」(以下「ふるさとワーホリ」)を 2017 年から開始した。参加者の滞在期間は凡そ 2 週間～1 か月程度であり、その地域の就労先で働くことによって実際に労賃を得ることができるほか、休日は地域内での学習、まちのイベントへの参加、地域内でのレジャーなど自由に休暇を過ごしていくことによって、実際に地域で「暮らす」とはどういうことかを体験することができる。

高濱ら³⁾によれば、ふるさとワーホリは、2009 年から開始された「地域おこし協力隊」制度において、参加者に住民票を移すことを課すことが高いハードルになっていたことから、より短期間かつ試行的に地域での暮らしを体験できる制度として新たに制度設計されたという背景がある。その結果、

SCAT とは

Steps for Coding and Theorization
の略でスキヤットと読む。

インタビューなどによって得られたデータにコードを付け(コーディング)、そのコードをもとに理論化を行う質的調査データなどの分析手法の 1 つ。

短期間での地域体験をコンテンツとすることで、参加ターゲット層のうちに大学生層も加わり、長期休暇期間中にふるさとワーホリを活用して地域に足を運ぶ学生も見られるようになった。

1.2.2.1-2. 研究の目的

総務省の萩原良智⁴⁾は、ふるさとワーホリの目的を「長期的な『定住人口』でも短期的な『交流人口』でもない、地域や地域の人々と多様に関わる者である『関係人口』となることで、中長期的に将来の移住・定住につなげるための取組」と位置づけている。なおこの記述における「関係人口」とは非訪問系よりも訪問系であることが想定され、幾度となく足を運ぶことで住民と顔なじみになるほどに交流し、地域活動に積極的に交流するような層であることが想定される。そこで本研究では、ふるさとワーホリが短期的目標とすべき「関係人口」の指標の一つとして「ふるさとワーホリ修了後に、再度その地域に足を運んだ層」を設定した。この層を本稿では「再訪型関係人口」と呼称する。再訪型関係人口は一度ふるさとワーホリへの参加後に、自身で再訪した者であるため、地域への繋がりや関心が一層強い層であると想定される。

実際にふるさとワーホリ参加後の参加者は再訪の意向は高いことはアンケートより明らかであるが、日常の時間的影響や交通費や宿泊費等の金銭的条件が影響するからか、なかなか実際に再訪に至る者は絞られている。その中で再訪行動に至った参加者は、ふるさとワーホリ期間中にどのような空間体験が得られたのか、また、ふるさとワーホリ先の地域に対して如何なる内的な心情の変化が発生したのかに関しては実務的にも既往研究においても十分に調査されていない。ふるさとワーホリに関する先行研究は高濱ら³⁾のように「コーディネーター」の役割に着目した研究が存在するものの、参加者の体験価値に着目した研究自体も見られておらず、萌芽的な研究領域であると位置づけられよう。よって本研究では、ふるさとワーホリ事業における再訪型関係人口創出の要因を抽出して体系化した上で、既存ストック活用を通して再訪行動をおこす地域体験を提供したことによる効果を評価することを目的とする。

21.2.2. 活動の概要

本稿では、昨年度のふるさとワーホリ実施自治体の中で最も多く参加者を受け入れていた「気仙沼市ふるさとワーキングホリデー事業」を対象とする。宮城県気仙沼市では2021年度より認定NPO法人Cloud JAPANが事業を受諾して開始し、2021年7月から2024年1月末まで232名が7～30泊にわたる地域生活を送った。就労の内容は農業から漁業、加工場での体験など多様で過去25企業が就労先として参画した。また参加者は、気仙沼市内にあるゲストハウス・シェアハウス・旅館にて他のふるさとワーホリ参加者に加えてスタッフ、地域住民らと共同生活を行っている。休日も他の参加者と共にレジャーや地域での学習などに取り組んでいることも多く、就労先や時期、参加期間、他参加者等によって人それぞれの体験をする。

長島⁵⁾は、アクションに科学的・学術的なりサーチを組み込み、コミュニティの継続的な発展を促進させることを目指すコミュニティ・アクションリサーチのプロセスとして、「①特定コミュニティの課題の発見と分析」「②方策の計画と体制づくり」「③解決策の実行」「④実行の過程と結果の評価」



を往来しながら活動を進め、総じて様々な側面から波及要件を導き出すとしている。本研究の活動では、①気仙沼における再訪型関係人口創出の課題の分析として SCAT、②導き出された理論記述の事業への導入方法の検討、③事業運営スタッフによる理論記述の実装、④ソフト面での導入の成果把握、①ハード的側面の整備不良による未実装の理論記述の特定、②既存ストック活用の計画、③改修・新たな滞在先としての活用の2サイクルを循環しており、本発表は2サイクル目の④に位置付けられる。

1.2.2.3. 再訪型関係人口創出に寄与する要因分析

まず2022年6月に2021年度(2022年3月末まで)の再訪型関係人口10名に調査依頼を申請した。そのうち調査の承諾を受けることができた8名(A-H)を対象とし、2022年6月から8月までの間にインタビューを行った。インタビュアーは気仙沼市ふるさとワーホリのコーディネーターを務めた第一著者、第三著者で構成されており、就労先への送迎や食事の手配、就労にかかわる悩みの相談にも関わっているため、調査対象者との深い関係性(ラポール)が築かれており、心理的安全性が確保されているといえる。

本研究では以下7つの質問項目を用意し、調査対象者に一問一答形式で解答していただいた。また解答内容について補足的説明を要する場合や、インタビュアーによって掘り下げが期待されると判断された場合は、関連質問を行っているため「半構造化インタビュー」に準拠しているといえる。

- ①ふるさとワーホリの情報を見つける前のあなたはどのような状況(状態)でしたか
- ②なぜふるさとワーホリに参加することを決めたのですか
- ③ふるさとワーホリ期間中を思い出してどのような経験が心に残っていますか
- ④ふるさとワーホリの経験をどのように捉え直していますか
- ⑤ふるさとワーホリ参加後、あなたにとって気仙沼はどういう場所として位置づけていますか
- ⑥なぜ再び気仙沼に足を運ぼうと考えたのですか
- ⑦再び訪れてあなたの中で気仙沼に対する心境の変化はありましたか

次に、前述の第一・三著者並びにふるさとワーホリ参加者としてインタビューと気仙沼で交流していた第二著者が、2022年7月から2023年3月の期間に発話データを大谷6)が体系化したSCATを用いて質的データ分析を行った。SCATは少数の質的データの文言解釈を加えながら、一般性の高い理論を形成することを目的とした質的研究法として知られている。本事例の場合は調査母数が限定され、理論的飽和に至れるほどに膨大な質的データが取得されるとは想定されなかったため、大谷7)によると調査対象者が少数でも理論形成が行われうるSCATを用いることが適切と判断した。

その結果、再訪型関係人口の創出に寄与するとして導出された理論記述は58点あり、そのうち滞在先の空間体験に関する理論記述は9点あった(表-1)。なお、今回の調査対象者の滞在先は、「気仙沼ゲストハウス「架け橋」」(以下「架け橋」)もしくは「子育てシェアスペース Omusubi」(以下「Omusubi」)である。真野ら8)によると、架け橋は、震災ボランティアらによって民家を改修することで2014年に設立された住民と宿泊客の交流をコンセプトにしたゲストハウス(旅館業法上の簡易宿所、13床)であり、宿泊機能だけ



でなく、気仙沼市内の観光ガイド、東日本大震災を経験した運営スタッフによる語り部、宿泊客に対する地元食材の提供等を行っている。立山ら 9) は、架け橋はコミュニティに内在する住民力や包摂力によそ者が気づき引き出すことによってソーシャル・キャピタルを醸成しているコミュニティエンパワメントの実践であるとしている。Omusubi は、2 階建ての母屋に「女性専用シェアハウス」「リラックスルーム」機能、1 階建ての離れに「一時預かり専門託児所」機能を併設し、庭部分は託児所の子どもの遊び場とシェアハウス住民の交流する場として共有するプランニングがなされている。土井ら 10) は、Omusubi は、子育て中のお母さんの自由な時間を作ったり、若い女性の子どもと関わる場を生み出すとし、「場所の使用者にターゲットを定め、チャレンジの土壌の役割を持つ場所」と定義している。



図-1 ペアハウスおらい改修図面

1.2.2.4. 滞在先となるストック活用への応用

本研究では、架け橋に隣接する空き家（元所有者：宮城県気仙沼市在住の60代女性、竣工日：1971年8月、種類：居宅、構造：木造亜鉛メッキ鋼板瓦葺2階建、宅地面積：324m²、建築面積：104m²）を2023年3月15日に購入し、同6月16日までCloud JAPAN スタッフによるセルフリノベーションを行い、ワーホリ参加者専用の滞在先「ペアハウスおらい」（以下「おらい」）をつくった（図-1）。基本設計を行うにあたり、前項で導出した理論

表-1 滞在先の空間体験に関する「理論記述」分類と滞在先でのエピソード

大類	小類	理論記述	理論番号	滞在先「ペアハウスおらい」（後述）でのエピソード
空間設計により所与する体験	対話の場	長時間過ごせる滞在拠点は他者との信頼関係が創出される場であり、暗闇での内省がもたらすアサーションがより一層促進される	B3	天井を抜いたことで明るい時間帯では開放的な空間が広がっている。暗くなると設置されたスポットライトの照明によって中央に置かれた机に光が集まり視線が下がることで、落ち着いた雰囲気が出される。
		自然に自己実現の語りになる空気のある場が設定されていることで、参加者は自ら現地交流者同士の語り合いを通して自己認知という学びを得る	D9	人数に制限されずに全員が集まれるよう掘りごたつを埋め、低高の机を設置した。加えて畳をフローリングに変えることで他の部屋とは異なる引き締まったモダンなリビングとなっており、この雰囲気がリビングでの語りの内容に反映されている。
	空間共有	ワーキングホリデー期間の共同生活を通じて自己発見が促される	B7	ドミトリーでは、カーテンを設置しないベッドとその配置による個人の空間を生まないための工夫がなされている。また、キッチン・トイレ・風呂等の設備は共有となる。そのため、ワーホリ参加者は専有空間にとどまることなく、日々の生活の中で多くの時間を他参加者と共に過ごす。
		シェアハウスはゲストハウスと比較して近接度が高いため、早期に心的緊張緩和がなされる	G2	滞在先に居住しているスタッフ（第五著者）の生活感の中に2週間限定で生活しているかたちとなる。人が生活しているという面影が、気仙沼を訪れたことのない参加者が過ごす場所に早期に安心感を与える。
滞在スタッフの振る舞いによる体験	新たな自己へのアクセス	理論的な先導的存在への本心開示機会が心に残る	B5	ワーホリOB（第五著者）と一緒に住んでいることで気仙沼の先導的立ち位置を取ることができている。また、各参加者の活動開始から約1週間後に行われる中間振り返りにおいて印象に残った人として名が挙がることは理論的な先導的存在として立ち振る舞っていることが推察される。
		ゲストハウスやシェアハウスなどの共同生活は、他者との相互作用によって良くも悪くも自己理解が深まる経験に	E6	滞在場所（おらい）での共同生活に加えて、隣接して立地する短期宿泊者・地元客が多いゲストハウス架け橋において様々な人と日々を共にすることで、自分と人の差を意識が向き、自分の特性を自然に理解していくようになる。
		シェアハウスは、将来モデルとの自然な交流という旅行経験を提供しうる	G3	多くの参加者は田舎暮らしに潜在的な憧れを抱いており、第五著者という年齢若いうちに移住して活動している人の話を同居する中で自然に聞くことができる。これは移住者交流会などといった意図してつくられる場では発生しえないロールモデルの構築である。
	第2のふるさと創出	就労先の客同士を繋ぐ行為、スタッフの宿における全集中の対話、参加者との交流特化型宿での語り合いは、参加者に偽・旧知の雰囲気醸成による存在肯定感を与える	A4	参加者・スタッフといった役割を超えた「一緒に住んでいる」人として朝の「おはよう」から夜の「おやすみ」を言える関係性が育まれている。この空気をつくるためにスタッフは分け隔てなく接している。
		地域内で自己-他者が受容しあうという「共受容体験」によって地域や空間に居場所性を感じる	E5	参加者専用の滞在先となっているため、毎日のように深夜遅くまで身の上話や将来の夢について語り合う時間が流れている。この会話のなかでお互いの価値観を認識し、認め合うことができている。
		開放型スタイルのジェネレーターが存在が行為リポート壱強期間に繋がりが、最終的に地域への忠誠心（ロイヤリティ）を生む	G4	参加者の平均年齢と比較して若い第五著者は、みんなが対等に楽しめるような話題を設定し、まずは自分の話から回すことで多くの人数がいても早い段階で参加者全員の心理的安全性を下げるのができたようだと言っている。



記述を参考にし、ゲストハウスとシェアハウス双方の再訪型関係人口創出に寄与する機能を統合する検討を行った。

まずリビング空間の設計に活用した理論記述 B3 に触れる。西川ら 11) は、教育現場における大学生のアサーション・トレーニングの実践の中で、全般的なコミュニケーション場面での安心感・信頼感では、「他者を信頼する感覚」「他者から信頼される感覚」がアサーションの心理面に影響しており、特に普段のコミュニケーションにおいては他者から「受け入れられる感覚」や「認められる感覚」を得られている者は、他者を尊重する意識や自己表現することへの肯定感を持ち合わせている可能性があることを報告している。再訪型関係人口となった参加者は他の参加者と架け橋で長時間を過ごした。西川ら 11) が教育現場の事例で報告した他者から「受け入れられる感覚」や「認められる感覚」を得ることで、他者を尊重する意識や自己表現することへの肯定的な意識を持つアサーティブな相互の信頼関係が育まれているといえる。このような対話の場をつくるために、掘りごたつと和室だったリビング（写真-1）の天井を抜き、間接照明を中心とした照明設計を行い、畳を外し、掘りごたつの掘り部分を埋めフローリング張りにした（写真-2）。

ふるさとワーホリ参加者は、様々な職業や背景を持つ市民が出入りする Omusubi の中にあるシェアハウスで日常を過ごした。シェアハウスの主たる居住者は、日頃から気仙沼で生活や仕事、学業など生活をしている市民であり、シェアハウスの中の空間にも住民の生活感が溢れている。このことで、理論番号 G2 の通り、参加者自らも早期に自分の家のようにリラックスできる効果があった。参加者は早期に心的緊張が緩和されることで、自然体で滞在常駐スタッフと話すことができるようになる。このような空間を実現するため、常駐スタッフの生活と参加者の生活を適度に分ける空間配置・躯体等の設置を行った。

具体的には、常駐スタッフ生活のための 2 階の整備、参加者生活用の男女別ドミトリーの整備、トイレ・更衣室の別入口の設置などである。

最後に、再訪型関係人口を創出する上でのスタッフの立ち振る舞いのしやすさと空間の関係について述べる。共同生活が馴染んでくると、自分を他者に共有し、他者も共有してくれる共受容体験が生まれている。参加者 A の「出会ってから 3 日目なのに、〇〇ちゃん（他参加者）とか自分について見つめながら泣きながら自分の昔について語ってくれて」という語りが代表的である。参加者目線で見ると、自分のあまり話したことのない話を聴いてもらえることにより信頼関係が生まれ、存在肯定感や居場所性が獲得されているといえる。また、昼間、参加者はスタッフと同じ空間にいて自然に話す時間が多い。2022 年 3 月末時点での気仙沼市ふるさとワーホリのスタッフ 6 名は、21~29 歳であり、全員が気仙沼市での複数回の滞在経験後の UI ターン者で構成される。再訪型関係人口は、スタッフが経験・知見をもとに悩みを聞いてくれることを報告しており、地方との関わり方やキャリアを考える上で、スタッフを理知的な先輩的存在と捉えている。また、そのスタッフの参加者と本気で向き合う姿勢が参加者にとって自分の本心を隠さず開示できた経験に繋がっている。こういった場をおらいや架け橋内の各所に設置することを目的として大空間ではなく、数人が集って話せる空間構成にしている。

1.2.2.5. おわりに



本研究では、今後、全国に拡大していくであろうふるさとワーホリにおける再訪型関係人口の創出に寄与する空間体験の要因を明らかにしてきた。その中で、関係人口創出の糸口である再訪行動を起こすために必要な要因の特徴について得られた知見を以下に表す。

1) 参加者がふるさとワーホリ参加後に再訪型関係人口となるには、滞在先での豊かな経験が重要である。実際、アクションを実行する以前の2021~2022年度の再訪率は27.7%(再訪者53名/参加者191名)だったが、2023年度におらいに滞在した参加者39名のうち、25名が再訪予定(再訪率:64.1%)である。コーディネーターや滞在先常駐者含む先輩移住者や地元市民と寝食や語りを伴う空間体験をする中で、自然な自己開示を促すスタッフの存在によって、自らにとって初の発見や肯定感を得たり、理想の暮らしを垣間見たりすることができている。

2) 参加者が実際に再訪行動を起こす際、スタッフとの関係が大きな要因となる。当事者となるスタッフが、関係人口となる要因を理論的に理解し、地域で活躍するチャレンジャーとして参加者に真摯に向き合うことのできる場が準備されていること、また、参加後も継続した繋がりを保持することで安心感を感じてもらうことが再訪行動に繋がっている。

他方で本研究より示唆される課題もある。現在参加者が再訪要因として価値を抱いている人間関係や空間は決して地域に永劫存在し続ける訳ではない点である。そもそも常駐スタッフも自らの人生を生き続けるアクターであるため、ライフイベントによって地域を離れることも想定されるし、またゲストハウスやシェアハウスも経営的課題や災害等のやむを得ない事由に直面した際には閉鎖することも考えられる。地域内の人や滞在先などの“ヒト”や“モノ”がその地域から損なわれた際も、再訪の価値が残るかについては今後の重要な研究課題である。

参考文献

- 1) 安藤慎悟, ゴルブチェンコ スタニスラワ, 久米山幹太, 谷口守 (2022年), 「中央省庁による関係人口創出施策の動向」, 都市計画報告集 Vol. 21 No. 2, pp. 204-211
- 2) 総務省ふるさとワーキングホリデーポータルサイト, <https://furusato-work.jp/overview/>, 2024年2月10日
- 3) 高濱優子, 今永典秀 (2021年), 「ふるさとワーキングホリデーを活用した地域創生インターンシップ」, グローバルビジネスジャーナル Vol. 1, pp. 56-63
- 4) 萩原良智 (2018年), 「「ふるさとワーキングホリデー」を活用した関係人口の創出について」, 地方自治, 地方自治体制度研究会 No. 851, pp. 52-63
- 5) 長島洋介 (2018年), 「コミュニティを舞台としたアクションリサーチの可能性」, バイオメカニズム学会誌 Vol. 42 No. 1, pp. 37-42
- 6) 大谷尚 (2008年), 「4ステップコーディングによる質的データ分析手法 SCAT の提案—着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き—」, 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (教育科学) Vol. 54 No. 2, pp. 27-44
- 7) 大谷尚 (2011年), 「SCAT: Steps for Coding and Theorization - 明示的手続きで着手しやすく小規模データに適用可能な質的データ分析手法 -」, 感性



工学 Vol. 10 No. 3, pp. 155-160

8) 真野洋介, 片岡八重子 (2017 年), 「まちのゲストハウス考」, 学芸出版社 pp. 170-176

9) 立山善康, 中野啓明, 伊藤博美 (2023 年), 「ケアリングの視座」, 晃洋書房 pp. 68-78

10) 土井杏奈, 真野洋介 (2022 年), 「東日本大震災の津波被災地域における震災復興で生じた商店街の新しい役割についての研究 - 宮城県石巻市と気仙沼市の中心市街地における既存商店街の集積地を対象として -」, 都市計画学論文集 Vol. 57 No. 3, pp. 1186-1193

11) 西川菜月, 吉岡和子 (2019 年), 「大学生に対するアサーションに関する授業の教育効果の検討 —コミュニケーション場面における安心感・信頼感に注目して—」, 福岡県立大学心理臨床研究: 福岡県立大学心理教育相談室紀要 Vol. 11, pp. 15-32

1.2.3 コレクティブインパクトに関する研究

研究結果を以下の通り投稿した。報告書作成時点において公開されていないため詳細は控えさせて頂く。

【タイトル】

地方におけるコレクティブ・インパクトを用いた政策形成の可能性
——けせんぬま子育てコレクティブインパクトプラットフォーム“コソダテノミカタ”を事例として

【著者】

田中 惇敏、鶴飼修

【投稿先学会】

地域デザイン学会誌 23 号

【要約】

近年日本において官民連携による政策推進では、公民が連携して公共サービスの提供を行うスキームであるパブリック・プライベート・パートナーシップ (PPP)、その代表的な手法のプライベート・ファイナンス・イニシアティブ (PFI) や市民の参画による「協働」が実践されている。特に市民との「協働」の推進は、地方自治体において条例が制定されるなど、定式化しつつある。しかしながら、その実態は、例えば、会議における市民代表者の意見聴取、既存の民間活動への行政支援など、シビックプライドを醸成する戦略的な政策決定のプロセスとはなり得ていない。

そこで、本稿ではコレクティブ・インパクト (以下見出し、固有名詞、引用を除き CI とする) の手法に着目し、地域における CI を用いた政策形成の可能性について論じる。CI は 2011 年にカニア (Kania) らが提唱したコレクティブ (集合的) な主体による課題解決手法であり、2023 年現在でも逐次 CI フォーラムが開催され、様々な社会課題解決への適用が議論・実践されている。

日本においても CI の実践はいくつかの事例・先行研究があるが、地方における CI を用いた政策形成の可能性について論じたものはない。本稿では、まず、CI の基本的な概念と日本においての実践事例や先行研究から、地方における CI を用いた政策立案の可能性について仮説を設定し、具体的な実践事例においてケーススタディを行い、関与する行政職員を含む関係主体の実態を明ら



かにする。その実態をふまえ、地域デザイン学会で提示されている ZTCA デザインモデルをベースに考察を行うことで、より実践的な政策形成の可能性を提示する。具体的な実践事例は、自らの活動を CI と謳っている「けせんぬま子育てコレクティブインパクトプラットフォーム“コソダテノミカタ”」を対象とした。

1.2.4 シティプロモーションに関する研究

【背景整理】

近日、子どもを産む中心世代の若い女性の将来人口をもとに議論される消滅可能性自治体がホットワードとなっている。人口戦略会議の指摘を真摯に受け止めることも重要であるが、市長の「国内トップレベルの施策を展開」、我々の「企業と市民の意識改革、実践」、政府の「大胆な地方創生戦略の拡大」があれば、2050 年に希望を抱くこともできると考えている。（「」内は令和 6 年 4 月 26 日付三陸新報の市長コメント）

国の子育て支援施策に目を当てると、こども家庭庁の子ども誰でも通園制度をはじめとし、昨今、子どもを幼少期から預け、母親が休息・社会活躍することを是とする論調が増えてきた。山口（2021）は、子育て支援政策の実証研究から「出生率向上において現金給付より現物給付（保育所整備）の方が 5 倍以上コストパフォーマンスが高い」「0～2 歳児への保育・幼児教育の機会拡大は、子どもの言語能力・非認知能力の発達促進、母親の「しつけの質」の改善・子育てストレス減少、社会の将来財政支出減・出生率改善」の因果関係を明らかにした。

気仙沼市は、市内の子育て環境改善のため、ふるさと納税を活用した「人口減少対策パッケージ」（令和 5 年 1 月 4 日公表）の一環として、所得制限なしの「第二子以降の保育料無償化」を打ち出した。今年度より、全ての認可外保育施設（就労制限なし）も第二子以降の保育料無償化の対象としている。今後は、0~2 歳の第一子の無償化を検討しているが、現時点で同様の施策を行なっているのは、山梨県南アルプス市・宮崎県都城市などごく少数であり、「所得・年齢・第一子でもよい・就労有無に制限なく、無償で預けることができる」自治体となれば、市の移住促進にとって大きなインサイトをうむことになることが想定される。合わせて、市独自の「子育てコレクティブインパクト」※の動きを広めることができれば、全国の子育て世代には有逸無二の価値を提案できる。

※ここでは、コソダテノミカタではなく、市・各子育て団体・認証店参画企業・子育て当事者（タウン mtg）を含めた市内の子育て環境をアクター全員で改善しようとする動き全体を指す。

【良いものをつくる+届ける=価値】

上述の通り、すでに気仙沼市では他自治体に比べ、独自の子育て支援政策があり、一子育て当事者としても子育てのしやすさを感じている。一方、これらの情報がまとまって分かる Web サイトはなく、市内外の子育て世代に届いているとは言い難い。昨年 7～8 月、市とコソダテノミカタが共同で行った気仙沼の子育て当事者 173 名に対する調査結果では、子育て制度の利用率 76.3% と低迷し、また、子育て支援施設全体の利用率 68.0% に比較して、過去 10 年に整備された支援施設は 18.5% だった。詳しく分析していくと、同調査の施設に対する感想自由記述を 3 ファクターに分別した場合、評価:批判:



意見＝ 51:13:109 となっていた。つまり、新たにできた施設・制度の認知度が低く、その結果、情報の届き方によって子育てのしやすさの認知に差が生まれてしまっていることが課題となっている。情報獲得の得意不得意によって受援に格差が出ていることも課題だが、移住施策につながっていないことも機会損失と言える。

【参考文献】

- ・三陸新報（2024）令和6年4月26日付朝刊一面
- ・山口慎太郎（2021）『子育て支援の経済学』、日本評論社
- ・気仙沼市（2023）令和5年1月4日付プレスリリース
<https://www.kesennuma.miyagi.jp/sec/s002/020/030/050/010/130/10/20230104kikakuka2.pdf>
- ・河井 孝仁（2020）『「関係人口」創出で地域経済をうるおすシティプロモーション2.0—まちづくり参画への「意欲」を高めるためには—』、第一法規
- ・大谷奈緒子・山下信（2012）『ラジオの多様化と将来的展望』。東洋大学社会学部紀要、第88集 (vo.l49, no. 1)
- ・南田勝也（2008）「音声メディア—ラジオとユース・カルチャー」橋元良明『メディア・コミュニケーション学』大修館書店
- ・島崎哲彦（2009）「放送メディアの特性と社会的機能」島崎哲彦・池田正之・米倉律『放送論』学文社

1.2.5 パターン・ランゲージを活用した「気仙沼市におけるまちのイメージ更新」の実践研究

慶應義塾大学井庭崇研究会、一般財団法人 SFC フォーラムとの共同研究として進めた。報告書作成時点において公開されていないため詳細は控えさせて頂く。

【要約】

本研究では、宮城県気仙沼市のまち全体のイメージを3.11の被災地から一新する実践を通して、創造社会におけるマーケティングの担い手を育成する方法論を確立することを目指す。現在、気仙沼市では行政、民間、非営利セクターが人口減少という課題を乗り越えようと画策し、その成果も現れてきつつある。一方、気仙沼市の住みよいまちや子育てに資するイメージの全国的な社会的認知度は低い。そのため、パターン・ランゲージを活用して、市民一人ひとりが地域ブランディングについて考え実践していくことを促す。



2. ソーシャルアントレプレナーが集う場の運営支援事業

本事業では、全国での活動支援するにあたり、経験を貯蓄し続けること、つまり私たち自身もソーシャルアントレプレナーであり続けることが大事であると感じており、「気仙沼ゲストハウス”架け橋”」を運営している。

2.1 気仙沼市ふるさとワーキングホリデー

2021 度から総務省・気仙沼市・市内の企業と連携した「気仙沼市ふるさとワーキングホリデー事業」を運営している。

2.1.1 プログラム実施概要・実施実績

実施概要	
都市間の関係人口を増加させるプログラム（仕様書第7条(3)ウ）	
テレワークや副業兼業可能な若者及びオンライン授業を受講する大学生等の二地域居住が可能な者を主な対象とし、7日から31日までの期間で、滞在することを想定したプログラムを企画し、地域間交流を促進する事業を行う。また、プログラムに必要な事業者との調整を行う。	
企画名	①【生きる、を学ぶ】ワーホリ
趣旨	自分の好きなことにチャレンジできる暮らし方や、理想な暮らし方をしたいというニーズが増えている。気仙沼というまちを知り、地域で想いをもって働く人、暮らしている人に会うことで、自分の今後の人生選択を考えるきっかけになる。この地域で自分がチャレンジしたいことや、理想な暮らし方・生き方ができるという実感をもてることで、移住に繋がることを目的とする。
ターゲット	・自分のやりたいことを見つけたい、視野を広げたいと思う大学1,2年生 ・卒業後の進路に悩む大学3,4年生 ・自分のやりたいことのチャレンジのために、今後転職をしようか迷っている、転職活動中、または休職中の社会人1年目～3年目
就労趣旨	日頃体験できない非日常的な作業を行う。作業を通して、日常のありがたみを感じるきっかけや、想いをもって働く人の話を聞けることで自分の将来を考えるきっかけをつくる。また、参加者同士のコミュニケーションや、就労先の方との交流も重視する。

実施実績	
開催日時	① 6月16日～6月30日【1名】 ② 7月14日～7月28日【3名】 ③ 8月3日～8月18日【8名】 ④ 8月25日～9月8日【7名】 ⑤ 9月15日～9月29日【7名】 ⑥ 10月13日～10月27日【1名】 ⑦ 11月10日～11月24日【1名】 ⑧ 12月8日～12月22日【0名】 ⑨ 1月12日～1月26日【2名】 ⑩ 2月2日～2月16日【3名】 ⑪ 2月16日～3月1日【6名】 ⑫ 3月1日～3月15日【8名】



就業先	<ul style="list-style-type: none"> ・Feel 農園【15 名】 ・株式会社おかえり【6 名】 ・omusubi【4 名】 ・ブライダルハウス藤仙【5 名】 ・カネダイ【2 名】 ・おりがみ【7 名】 ・アサヤ【2 名】 ・介援隊内湾シーパーク【1 名】 ・蔵内之芽組【11 名】 ・CAMELLIA【3 名】 ・みらいと【2 名】 <p>※1 名が 2 企業での同時就労あり</p>
宿泊先	<p>(1) 気仙沼ゲストハウス 架け橋 (2) 気仙沼シェアハウス Omusubi (3) 気仙沼ペアハウス おらい</p>
参加人数	47 名
スケジュール	<p>1 日目 [チェックイン：16～18 時ごろ予定] チェックイン [夜] 架け橋で歓迎会（自己紹介）</p> <p>2 日目 [朝活] 伝承館の見学など [日中] 気仙沼市内のまち歩き [夜] 架け橋で夕食</p> <p>3 日目～ [就業] 気仙沼市内の企業有償インターン [ホリデー] ものづくり WS [夜] 宿で夕食・語り部 WS・学びの場・中間振り返り WS・最終振り返り WS（観光客、移住者、地域住民らとともに）※参加者の希望に合わせコンテンツ変更あり</p>
その他	現地までの交通費及び現地での食費は自己負担とした。

実施概要

参加者の成長機会を創造するプログラム（仕様書第7条(3)ア）

学生及び20代から30代までの若者を主な対象とし、1ヶ月の期間で滞在することを想定し、本市を参加者が成長する機会としてプログラムを企画する。乙は、参加者に対して講習会やワークショップを行う。また、プログラムに必要な事業者との調整を行う。

求職求人のマッチング機会の創造をするプログラム（仕様書第7条(3)イ）

卒業後に就職を希望する学生や求職者を主な対象として、7日から31日までの期間で、滞在することを想定したプログラムを企画し、域内就職を想定した支援を行う。また、プログラムに必要な事業者との調整を行う。

企画名	②[前のめり]ワーホリ
趣旨	気仙沼を「成長」（アクティブラーニング）の舞台として、市内企業や団体で長期インターンしたい人向けのプログラム。
ターゲット	<ul style="list-style-type: none"> 働き方の選択肢を増やしたいと考えている社会人 卒業後の進路ややりたい事について考えたい学生 地方での暮らしに興味がある人
就労趣旨	個人の暮らしの延長線上から発展し、起業された企業（起業家）先での就労を紹介する。
仕様書 対応理由	滞在期間1か月を主としたプログラムであり、参加者の属性によって就労先の調整を行ってきた。メインプログラムである「生きる、を学ぶ」と比べて就労日も多いため、就労やインターンを通して成長が促され、より実践的な体験を提供した。域内就職を想定したもので成長を促すことが長期滞在にすることで実現した。その為、この「前のめり」がア、イに該当していると考えられる。

実施実績

開催日時	(1)7月14日～8月13日【1名】 (2)8月1日～8月31日【1名】 (3)8月2日～9月2日【1名】 (4)8月3日～9月3日【1名】 (5)8月4日～9月4日【1名】 (6)8月5日～8月31日【1名】 (7)8月9日～8月23日【1名】 (8)8月12日～8月30日【1名】 (9)8月17日～9月15日【1名】 (10)9月1日～9月8日【2名】 (11)9月1日～9月30日【1名】 (12)9月11日～10月11日【1名】 (13)10月1日～10月31日【1名】 (14)10月8日～11月5日【1名】 (15)11月7日～11月16日【1名】 (16)11月17日～11月28日【1名】 (17)12月5日～12月12日【1名】 (18)2月12日～2月22日【1名】 (19)2月8日～2月16日【1名】
------	---



	(20)2月12日～3月10日【8名】 (21)2月16日～3月15日【1名】 (22)2月17日～3月17日【2名】 (23)2月29日～3月13日【1名】 (24)2月28日～3月17日【1名】 (25)3月1日～3月9日【1名】 (26)3月1日～3月31日【1名】 (27)3月4日～3月31日【1名】
就業先	<ul style="list-style-type: none"> ・Feel 農園【1名】 ・くるくる喫茶【5名】 ・株式会社おかえり【6名】 ・蔵内之芽組【6名】 ・まるオフィス【2名】 ・Ripple【2名】 ・おりがみ【3名】 ・カネダイ【2名】 ・気仙沼地域戦略【1名】 ・合同会社 colere【8名】
宿泊先	<ul style="list-style-type: none"> (1)気仙沼ゲストハウス 架け橋 (2)気仙沼ベアハウス おらい (3)気仙沼シェアハウス Omusubi (4)(株)菅運本社ビル
スケジュール	<p>1日目 [チェックイン: 16～18時ごろ予定] チェックイン [夜] 架け橋で夕食(自己紹介)</p> <p>2日目 [朝活] 伝承館の見学など [日中] 気仙沼市内のまち歩き [夜] 架け橋で夕食</p> <p>3日目～ [就業] 気仙沼市内の企業有償インターン [夜] 宿などで、夕食・語り部・学びの場(観光客、移住者、地域住民らとともに)※ 特に社会人交流や就活相談に焦点を当てる。</p>
参加人数	36名

実施概要

参加者の成長機会を創造するプログラム(仕様書第7条(3)ア)

学生及び20代から30代までの若者を主な対象とし、1ヶ月の期間で滞在することを想定し、本市を参加者が成長する機会としてプログラムを企画する。乙は、参加者に対して講習会やワークショップを行う。また、プログラムに必要な事業者との調整を行う。

実施概要

参加者の成長機会を創造するプログラム（仕様書第7条(3)ア）	
<p>学生及び20代から30代までの若者を主な対象とし、1ヶ月の期間で滞在することを想定し、本市を参加者が成長する機会としてプログラムを企画する。乙は、参加者に対して講習会やワークショップを行う。また、プログラムに必要な事業者との調整を行う。</p>	
企画名	③【卒論】ワーホリ
趣旨	<p>卒業論文は学生時代の集大成であり、大学生に立ちふさがり最後の壁。また後の人生において自分の考えを無制限に論じられる機会は殆どないため、生涯に残り続ける挑戦の機会となる。</p> <p>地域社会を舞台とした卒論を書こうとする学生は、フィールドワークのために地方を訪れるものの、社会人に比べて自由に費用（交通費・宿泊費など）を使えるわけではなく、貯金が底をついてしまう状況となっている。学生時代に地域を舞台に卒業論文や修士論文を書いてきた気仙沼のふるさとワーホリスタッフも複数いるが、いずれもフィールドワーク費用の捻出に悩んできたという経験がある。</p> <p>しかし地元に興味を持ち、卒論のテーマとしてまで選んでいただけることは、地域目線では嬉しいものであり、卒論を書くプロセスで地元を学生に知って頂けるだけでなく、住民でさえ知りえないような地域の過去－現在－未来を学生から学べる機会になる。そこで、気仙沼の地元企業でワーキングホリデーとして働き、地元の方との関係を結びながら卒論の執筆を進めていく。</p>
ターゲット	・気仙沼を気仙沼を舞台とした卒業論文を執筆予定の学生 舞台とした卒業論文を執筆予定の学生
就労趣旨	可能な限り学生の研究テーマに近い分野の企業をご紹介し、また研究計画についても参加者が望む場合は企業にも共有することで、地元企業による研究協力を結びやすい体制も構築する。

実施実績

開催日時	(1)7月20日～7月30日【1名】 (2)8月4日～9月3日【1名】 (3)8月6日～8月30日【1名】 (4)9月12日～9月26日【1名】 (5)10月17日～11月9日【1名】
就業先	・Feel農園【2名】 ・株式会社おかえり【1名】 ・プライダルハウス藤仙【1名】 ・明海荘【1名】 ・蔵内の芽組【1名】 ※1名が2企業での同時就労あり
宿泊先	(1)気仙沼ゲストハウス“架け橋” (2)気仙沼ペアハウス“おらい”
スケジュール	1日目 [チェックイン：16-18時ごろ予定]チェックイン [夜] 架け橋で夕食（自己紹介） 2日目



	<p>[朝活] 伝承館の見学など [日中] 気仙沼市内のまち歩き [夜] 架け橋で夕食</p> <p>3日目～ [就業] 気仙沼市内の企業有償インターン [夜] 架け橋や飲食店、つんとぼりで夕食、滞在中支援、研究相談 (観光客、移住者、地域住民らとともに)</p>
参加人数	5名

実施概要

参加者の成長機会を創造するプログラム (仕様書第7条(3)ア)

学生及び20代から30代までの若者を主な対象とし、1ヶ月の期間で滞在することを想定し、本市を参加者が成長する機会としてプログラムを企画する。乙は、参加者に対して講習会やワークショップを行う。また、プログラムに必要な事業者との調整を行う。

求職求人へのマッチング機会の創造をするプログラム (仕様書第7条(3)イ)

卒業後に就職を希望する学生や求職者を主な対象として、7日から31日までの期間で、滞在することを想定したプログラムを企画し、域内就職を想定した支援を行う。また、プログラムに必要な事業者との調整を行う。

企画名	④[保育]ワーホリ
趣旨	<p>本プログラムでは市外に住む保育資格を有する人材及び指定保育士養成施設に在籍する学生向けに、気仙沼の多様な保育を学べるプログラムを実施する。</p> <p>理想の暮らしと保育に触れる経験を提供することで「気仙沼で保育士として働きたい」という思いを持った人材の移住を目指し、市内の保育士人材の確保に繋げる。</p>
ターゲット	・市外に住む保育資格を有する者・指定保育士養成施設に在籍する学生
就労趣旨	・高い保育水準を学べる認可保育所、気仙沼ならではの自然に特化した保育(自然遊び保育モリノネ)、子育てママに寄り添った保育(子育てシェアスペース Omusubi)など、保育養成施設の実習では体験出来ないことを就労を通して学べる機会を作る。
仕様書対応理由	ターゲットを限定する事でその人に沿った体験を提供することができ、学生が卒業後の就職を想定することができる。この事から保育ワーホリは成長を促すプログラムであり、求職求人へのマッチングにつながっていることから仕様書のア、イに該当していると考えられる。

実施実績

開催日時	(1)9月15日～10月10日【1名】 (2)10月31日～11月14日【1名】 (3)11月4日～11月14日【1名】 (4)11月11日～11月19日【1名】 (5)11月17日～12月14日【1名】 (6)11月21日～11月28日【1名】 (7)12月6日～1月5日【1名】 (8)12月23日～12月30日【1名】 (9)1月13日～1月28日【1名】 (10)2月13日～2月22日【2名】 (11)3月6日～3月13日【1名】 (12)3月15日～3月23日【1名】 (13)3月16日～3月23日【1名】
就業先	・自然あそび保育モリノネ【13名】 ・子育てシェアスペース Omusubi【8名】 ・気仙沼市立かやの実保育所【4名】 ・気仙沼市内内の協保育所【1名】 ※1名が2企業での同時就労あり
宿泊先	気仙沼シェアハウス Omusubi
スケジュール	1日目 [チェックイン：14-18時ごろ予定] チェックイン [夜] Omusubi で夕食 2日目 施設見学/観光 [日中] 子育て支援施設の見学 気仙沼市内のまち歩き [夜] Omusubi でシェアメイトと夕食 3日目～ [就業] 気仙沼市内の保育施設 [夜] Omusubi や飲食店で夕食、架け橋のイベントや夕食に参加 (観光客、移住者、地域住民らとともに)
参加人数	14名



実施概要

(仕様書第7条(3)エ)

乙は、甲に対して、同号アからウまで定めるプログラムの他に、実施状況や社会情勢に合わせて必要なプログラムを企画提案し、甲の承諾を得て実施した。

企画名	⑤[出張架け橋]
趣旨	本プログラムは、上記①～④に参加した移住検討者が居住地の都心で移住検討者コミュニティを形成すること及び移住したい気持ちを向上することを目的に開催する。気仙沼の滞在中は、参加者が固定されるため、横断的に関心の近い人を繋げることで、まとまった移住の議論ができると考えている。
ターゲット	東京、大阪、福岡など参加者の見込まれる都心の住民
就労趣旨	なし

実施実績

開催日時	2023年7月8日(大阪) 2023年11月25日(東京)
交流場所	●大阪 居酒屋 椿-TSUBAKI- 梅田東通り店〈大阪府大阪市北区堂山町3-13 3F-B〉 ●東京 グランスター池袋〈東京都豊島区池袋2丁目66-3 同源ビル B1〉
スケジュール	●大阪 <u>6月10日(金)</u> 11時発 : 仙台から大阪まで(飛行機) 14時着 : 大阪着 18時30分 : スタッフ集合 19時 : 出張架け橋交流会開始 23時 : 出張架け橋交流会終了 <u>6月11日(土)</u> 16時 : 大阪から仙台まで(飛行機) 19時着 : 仙台着 ●東京 <u>11月25日(土)</u> 14時 : 買い出し、JR大塚駅改札前集合 16時 : 調理、準備会場集合 18時 : 会場設営、一次会会場集合 18時30分 : 受付開始 19時 : 出張架け橋交流会開始 21時 : 出張架け橋交流会終了

参加人数	●大阪：15名 ●東京：56名
------	--------------------

ワーホリオンライン説明会実績

開催日時	参加人数
2023年5月22日(月)	2名
2023年5月23日(火)	5名
2023年5月29日(月)	6名
2023年5月30日(火)	7名
2023年7月4日(火)	9名
2023年10月23日(月)	2名
2023年10月29日(日)	5名
2023年11月8日(水)	3名
2023年11月15日(水)	1名
2023年12月1日(金)	11名
2023年12月13日(水)	6名
2024年1月5日(金)	7名
2024年1月17日(水)	2名
2024年2月1日(木)	2名

参加に係る費用

生きる、学ぶ・前のめり

自転車代(保険加入済み・何度でも)	2,000円
洗濯代(何度でも)	1,000円
案内費	3,000円
ふりかけWS代	1,000円
語り部WS代	2,000円
手紙郵送代	1,000円

※一律1万円(滞在期間に長短に限らず)

卒論

自転車代(保険加入済み・何度でも)	2,000円
洗濯代(何度でも)	1,000円
案内費	3,000円
ふりかけWS代	1,000円
語り部WS代	2,000円



手紙郵送代	1,000 円
講師代(卒論に限る)	10,000 円

※一律 2 万円(滞在期間に長短に限らず)

保育

保育スタッフに対する謝礼	1,500 円
入居前抗原検査代	1,500 円
検便	500 円
託児前抗原検査代	1,500 円

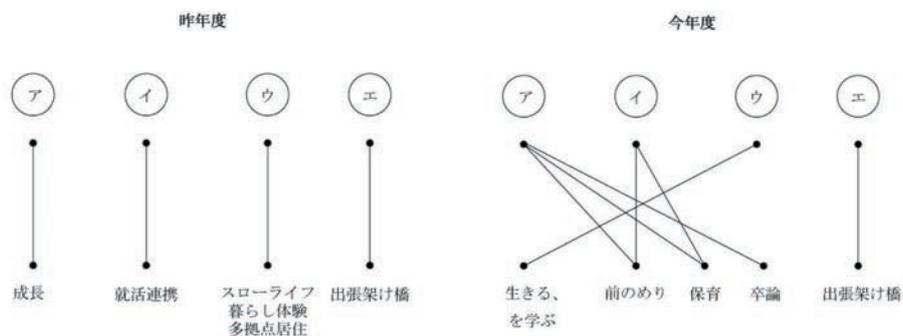
※一律 5 千円(滞在期間に長短に限らず)

※食費希望制 500 円

※案内費とは→案内にかかる交通費などのガソリン代など。

プログラム制導入にあたっての仕様書第 7 条(3)ア～エとの対応

参加者の理解促進を目的として今年度より独自の「プログラム制」を導入している。コンセプトを中心として分けた 5 つのプログラムで気仙沼市ふるさとワーキングトリデー全体を構成しており、仕様書第 7 条(3)ア～エの企画内容を横断しているため以下の通り対応図を整理し、仕様書第 7 条(3)ア～エの企画内容との対応が複数あるプログラムにおいては、上述の通り「仕様書対応理由」を付記した。



2.1.2 申込状況

申込者数	114名	
参加者数	102名	
期 間	2023年4月1日～2024年3月31日	
属 性	18～20歳	42名
	21～23歳	40名
	24～26歳	12名
	27～29歳	2名
	30歳以上	6名
概要		
<p>本事業を4月から運営を行い、102名が本市を訪れた。面談や事前アンケート・事後アンケートの結果から参加者の申込経路から、参加者の属性をまとめた。</p>		
流入経路		
<p>図1は、本事業を認知してから、受入企業先とのマッチングまでの流れを表したものである。図1の「認知」にあたる「本事業をどのように知ったか」の事前アンケート結果（研究ワーホリを除く）によると、最も多くを占めたのは「友人や知人からの紹介」であった（図2）。詳細の数値に関しては、「年度末報告参加者、移住者及び移住者の家族等で住民登録をした者の一覧」に元データが記載されている。</p>		
<p>図1 ワーホリ申込から企業のマッチングまでの流れ</p>		
<p>図2 ワーホリ参加者の申込に至るまでの流入媒体</p>		



都道府県別参加者

図3は、本事業の申込者を都道府県別でグラフに表したものである。この結果からは、ふるさとワーキングホリデーの趣旨に該当する都心部からの申込が多いことがわかる。詳細の数値に関しては、「年度末報告参加者、移住者及び移住者の家族等で住民登録をした者の一覧」に元データが記載されている。

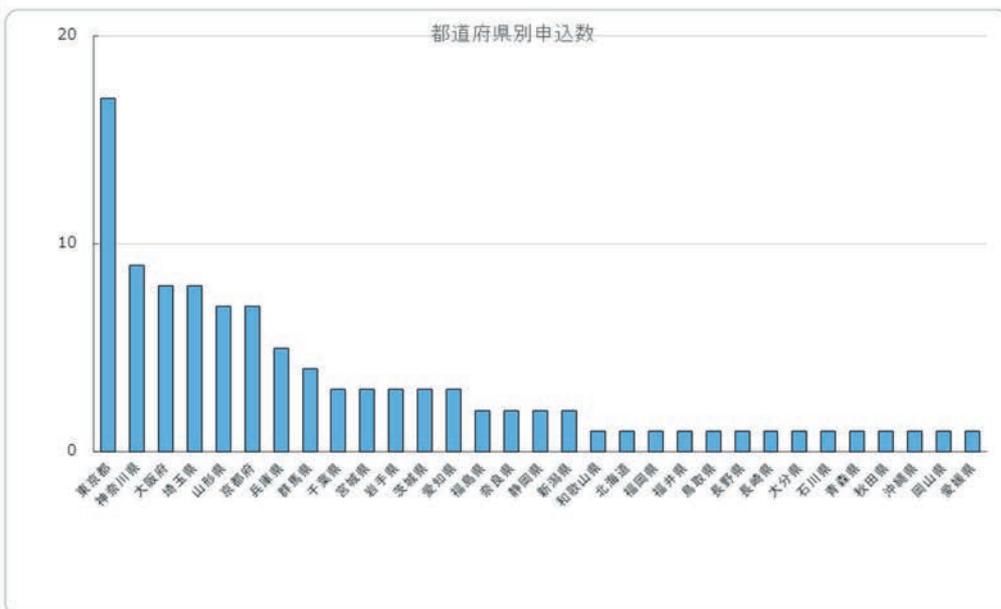


図3 ワーホリ申込者の都道府県別申込者数

所属別申込者数

図4は、本事業の申込者を所属別でグラフに表したものである。

【大学1～2年生：18～20歳くらいの世代】

〔傾向〕

- ・経験志向
→明確な目標や理由は定まっていないが、自分の経験のため。
- ・交流志向
→人との交流や出会いを求めている。

【大学3～4年生：20～23歳くらいの世代】

〔傾向〕

- ・専門志向
→大学の学問で地域を学んでおり、実際に地域に行ってみたい（主に大学3年生）。
→卒論で地域のことを執筆するために、実際に地域での調査を試みたい（主に大学4年生）。
- ・迷走志向
→今後の進路に迷いながら、選択肢を広げるために参加してみる。
- ・交流志向
→人との交流や出会いを求めている。

【社会人：23～29 歳くらいの世代】

【傾向】

- ・転職活動志向(すぐではないがいずれ地方の移住を検討している)

詳細の数値に関しては、「年度末報告参加者、移住者及び移住者の家族等で住民登録をした者の一覧」に元データが記載されている。

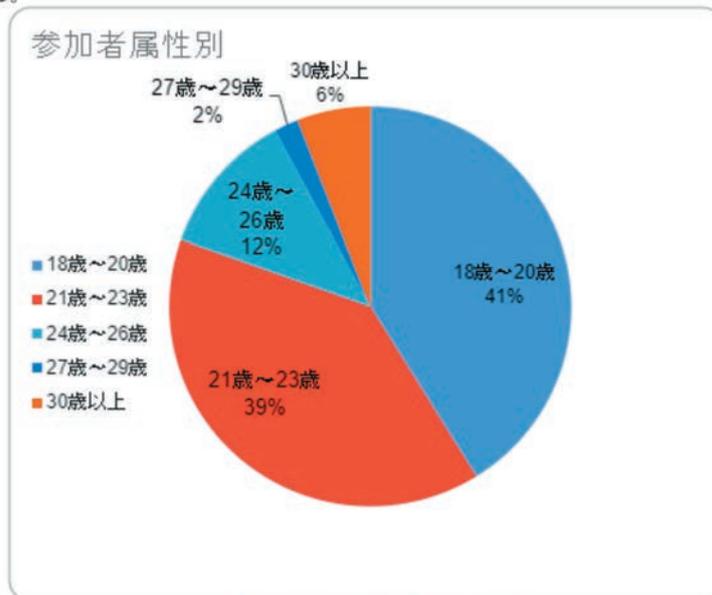


図4 ワーホリ申込者の所属別申込者数



2.1.3 参加者からの声と参加後の動向

移住・定住促進施策に関する課題の抽出・整理(仕様書第7条(3)オ)

乙は、同号アからエまでに定めるプログラムの参加者に対して、甲の移住等に関するアンケート調査を行う。

「ふるさとワーキングホリデー事後アンケート」を作成した。以下はそれぞれのアンケート結果である。

就労先の満足度を教えてください。

満足度を10段階評価で統計をとった。10が「とてもいい体験ができた」、1が「あまりいい体験ができなかった」である。半数以上が10を評価し、就労先の満足度はとても高いと言える。

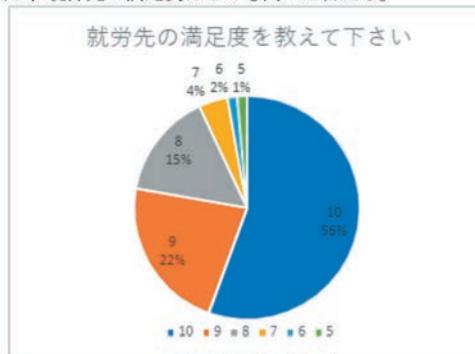


図5 就労先の満足度

就労先で、印象に残ったエピソードや思い出があれば教えてください。(抜粋)

・短い期間の就労で、日程調整などをお願いしたにも関わらず、丁寧に対応してくださり感謝しています。歓迎会やお別れ会をしてくださったり、震災の語り部や社会人として働くことについてお話してくださったりと普段はできないような貴重な体験をさせていただきました。アルバイトの私に対しても、丁寧に真摯に向き合ってください、素直に嬉しかったです。振袖の着付けもしていただけて本当に楽しかったです。家族にも写真を送りました。とても喜んでおり、よろしくお伝えくださいとのことでした。ありがとうございました。また気仙沼に遊びに行きます！(女性、19歳)

・5日間、本当にお世話になりました！カウンターに並んで、タイミングを合わせて提供するなど、ワクワクする場面もあり、貴重な経験をさせていただきました。何より店主さんのネットワークで、想像をはるかに超えた、たくさんの町の皆さまと交流させていただいたことは私の財産です。ありがとうございました！(女性、44歳)

・1番印象に残っているのは船の上で新鮮なホタテを食べさせていただいたことです。きつい作業の後、最高のロケーションの中で食べた味は格別でした。とにかく優しく、温かい方ばかりで本当によくしていただき、ありがたかったです。休憩時間の穏やかな会話など全てが良い思い出です。(男性、19歳)

ホリデーの満足度を教えてください。

10が「とても満足した」、1が「あまり満足ではなかった」である。半数以上が10を評価し、ホリデーの満足度が高い結果となった。

ホリデーの満足度を教えてください

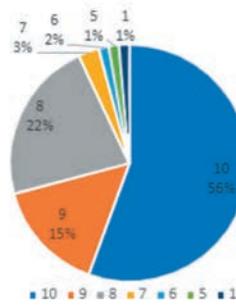


図6 ホリデーの満足度

ホリデーで印象に残ったエピソードや思い出があれば教えてください。(抜粋)

・たったの2週間のワーホリと思っていたけど、毎日色んなところに連れて行ってもらって色んな人と出会って色々な経験をする中で、毎日がつい昨日のこのように思えるくらい濃い時間になりました。海に行ったらずぼんこをしたり、内湾でクルーズ船に乗ったり、亀山で流れ星を見たり、カフェを巡ったりしたことは本当に楽しかったです。でも架け橋やおらいでみんなと夜遅くまで喋ったりお散歩に行った時間も本当に楽しかったです。(女性、19歳)

・架け橋でみんなとたわいもない会話をするのが1番楽しかった。色々な景色の綺麗なおところに連れて行ってもらったり、美味しいご飯屋さんで連れて行ってもらったのもすごく楽しかった。(女性、19歳)

プログラムコンテンツの満足度を教えてください。

10が「とても満足した」、1が「あまり満足ではなかった」である。満足度が高いと言える8以上の評価をした人は6割をこえた。なお、1と答えた方は都合によりプログラムコンテンツに参加できなかったという理由のため、参加した人からの評価は全体的に高いと言える。

プログラムコンテンツの満足度を教えてください

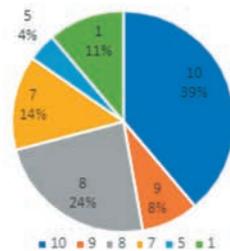


図7 プログラムコンテンツの満足度

プログラムコンテンツで印象に残ったエピソードや思い出を教えてください。(抜粋)

・私にとって、中間振り返りWSが最も印象的でした。今大事なものを、またこれから大事にしたいことって何だろうと思うことはあっても、実際そこまで時間をかけて考えたことはありませんでした。自分自身と向き合うことができた貴重な時間となりました。さらに、他のチームメンバーのカードを見て、それぞれの考えや思いを知って、みんなのことをもっと知ることができたし、自分にとっての学びにもなりました。(女性、20歳)

・ふりかけワークショップ。本当に美味しかった。また趣のある乾物屋さんでこういった若者も楽しめるワークショップがあることが興味深かった。(女性、20歳)



・語り部WSでは、皆さんの人生談や震災のこと、マイプロジェクトや沼大のことなど様々な事を聞くことができ、自分の中での知見がさらに深まると同時に、課題意識を持つことができたと思います。振り返りWSでは、カラーバリエーションカードでそれぞれの個性や大切にしているものを知ることができ、その人をより深く知るきっかけとなったため、仲が深まるきっかけになったのではないかと思います。（男性、21歳）

滞在先の満足度を教えてください。

10が「とても満足した」、1が「あまり満足ではなかった」である。7割以上の人が満足度が高い評価をつけた。

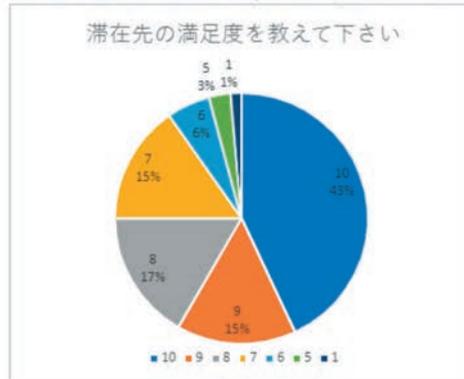


図8 滞在先の満足度

滞在先への愛着度を教えてください。

10が「とても愛着を持たた」、1が「あまり愛着を持たなかった」である。愛着度が高い8以上の評価をした人は8割をこえ、多くの人が滞在先に親しみを持ってくれたことが分かる。

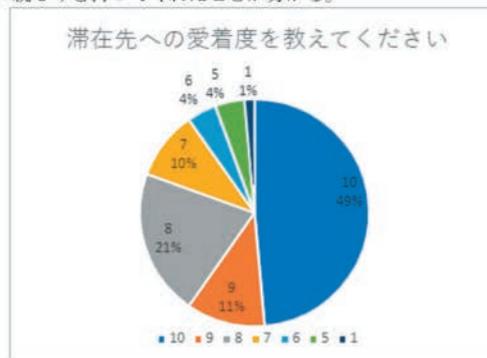


図9 滞在先への愛着度

滞在先で、印象に残ったエピソードや思い出を教えてください。（抜粋）

・私は共同生活も一人暮らしもしたことがなかったため、今回8人での共同生活にだいぶ不安を感じていました。しかし実際に暮らしてみると、出会って数日しか経っていない人たちと「おはよう」「行きます」「行ってらっしゃい」「おかえり」「ただいま」「おやすみ」という言葉を自然と交わっていて、それがとても嬉しかったです。居間に行けば誰かいておしゃべりできて、そこがみんなが集まる温かい場所になっていて、かけがえない日々や思い出がああ居間に詰まっている感じがします。また帰りたいと思わせてくれる場所が私にとってのおらいです。（女性、20歳）

・みんなで餃子を作ったり、日本酒に合う食べ物をたくさん買ってきたり、毎日の食事がとても楽しかったこと。スタッフさんも忙しい中で参加してくれて、みんなでわいわいしながら、おいしいものを食べたことが本当に良い思い出です！（女性、21歳）

気仙沼のワーホリを友人や知人に勧めたいと思いますか？

10が「ぜひ勧めたい」、1が「勧めたくない」である。6割以上の方が10の評価をつけ、ぜひ勧めたいとした。

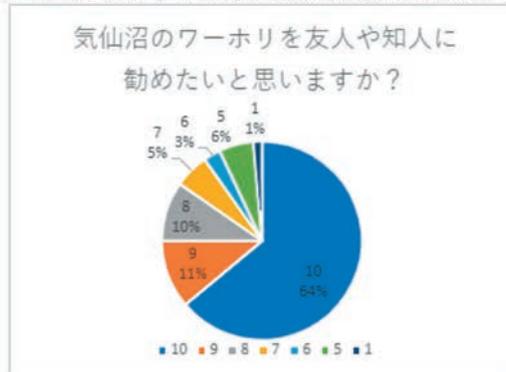


図10 気仙沼のワーホリを勧めたいか

気仙沼とは、今後どのような関わりをしたいと思いますか。

7割以上の方が「定期的に気仙沼に訪問したい」と答えてくれた。「いずれ移住をしたい」「もう少しお試して気仙沼にいてみたい」と答えた方が合わせて約2割いたので、ワーホリ参加後のフォローや移住支援に繋げたい。

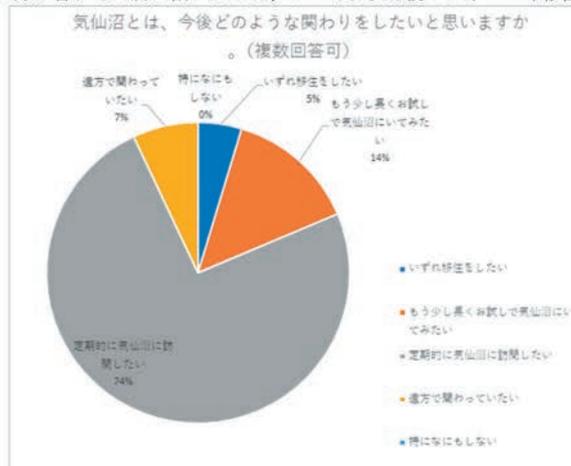


図11 気仙沼との今後の関わり方

参加者からの全体を通じた声 (抜粋)

・本当に2週間毎日が楽しかったです！シェアハウスをすること自体初めてだったけど、私はすごくシェアハウスが好きなタイプの人なんだということがこの2週間で分かりました。色んな人と出会えて、色んなものを食べて、色んな場所を訪れて、色んな景色をみて、就労体験のために来た気仙沼だったけど、それだけでなく本当にたくさんの思い出を作ることが出来て凄く嬉しいです！スタッフの方も本当に皆さんに良くしていただいて、ありがとうございます。ご飯も美味しいし、スタッフさんとも色んなことを話せてとても楽しかったです！また気仙沼に絶対に来ようと思っているので、その時はまたよろしくお願いします！！ (女性、19歳)

・ふとした出会いからたくさんを知り、沢山広がついていった約2週間でした。沢山の方と出会って色んなものを食べて見て、会話をして繋がりを持ったこと、すごく素敵な時間でした。ありがとうございます。(男性、22歳)



今年度の移住者・関係人口

2023 年度移住者:9 名 2023 年度再訪者:49 名

移住者リスト

No	名前	ふりがな	職種	状況	補足
2021年度スタッフ移住者					
1	田中 博敏	タナカアツシ	スタッフ	2021年4月14日移住	福岡より移住(元)で就労
2	田中 彩夏	タナカアヤカ	スタッフ	2021年4月14日移住	東京より移住(元)で就労
3	木原 葉	キハラアオイ	スタッフ	2021年6月11日移住	東京より移住(元)で就労
4	田中 慧	タナカサトル	スタッフ	2021年10月1日移住	茨城より移住(元)で就労
2022年度スタッフ移住者					
5	高山 千裕	タカヤマチサト	スタッフ	2022年4月移住	東京より移住(元)で就労
2021年度参加者移住者					
1	並木 隼人	ナミキアユト	参加者	2022年1月19日移住	東京より移住(元)で就労
2	福岡 海咲	フクオカミサキ	参加者	2022年12月移住	大阪より移住(元)で就労
3	五十嵐 拓海	イガラシユウマ	参加者	2022年10月31日移住	東京より移住(元)で就労
4	今村 ちひろ	イマムラチヒロ	参加者	2022年4月移住	愛知県より移住(元)で就労
5	柳瀬 彩花	ヤナセアヤカ	参加者	2022年4月移住	兵庫より移住(元)で就労
2022年度参加者移住者					
6	深沢 結美	フカサワアユミ	参加者	2022年6月移住	岩手より移住(元)で就労
7	高橋 穂菜	タカハシモモナ	参加者	2022年10月移住	兵庫より移住(元)で就労
8	川崎 遥	カワサキアサ	参加者	2022年10月移住	東京より移住(元)で就労
9	坂根 幸秀	サカネユウキ	参加者	2022年11月移住	東京より移住(元)で就労
10	鎌石 大貴	カマシダイキ	参加者	2023年2月移住	福岡より移住(元)で就労
11	竹野 夢妃	タケノユメキ	参加者	2023年3月移住	福岡より移住(元)で就労
12	夢田 雄介	ユメダユウスケ	参加者	2023年4月移住	千葉より移住(元)で就労
13	田島 愛莉	タジマアイリ	参加者	2023年4月移住	神奈川より移住(元)で就労
14	高野 真字香	タカノマリア	参加者	2023年4月移住	福岡より移住(元)で就労
2023年度参加者移住者					
15	大塚 航貴	オオツカコウキ	参加者	2024年4月移住	千葉より移住(元)で就労
16	岩崎 穂也	イワサキシュウヤ	参加者	2024年4月移住	福岡より移住(元)で就労
17	西岡 勇翔	ニシオカユウト	参加者	2024年4月移住	京都より移住(元)で就労
18	数岡 香凛	マサオカカリン	参加者	2024年4月移住	東京より移住(元)で就労
19	甲斐 景都	カイケイト	参加者	2024年4月移住	岩手より移住(元)で就労
20	福田 ゆき	フクダユキ	参加者	2024年4月移住予定	福岡より移住(元)で就労
21	福垣 凛	フクキリ凛	参加者	2024年5月移住予定	山形より移住(元)で就労
22	及川 康平	オキカワコウヘイ	参加者	2024年4月移住	岩手より移住(元)で就労
23	杉村 秀樹	スギムラヒデキ	参加者	2024年5月移住予定	大阪より移住(元)で就労

関係人口リスト

名前	ふりがな	参加年度	状況
関係人口			
133	上村友香	2023年度参加者	再訪しゲストハウス架け橋に宿泊
134	ウエストロップはんな	2023年度参加者	再訪しゲストハウス架け橋に宿泊
135	後藤麻由香	2023年度参加者	再訪しゲストハウス架け橋に宿泊
136	並木隼人	2023年度参加者	再訪しゲストハウス架け橋に宿泊
137	上村友香	2023年度参加者	ワーホリリピーターとして再訪
138	村上瑞南	2023年度参加者	再訪しゲストハウス架け橋に宿泊
139	馬場悠貴	2023年度参加者	再訪しゲストハウス架け橋に宿泊
140	大塚航貴	2023年度参加者	再訪しゲストハウス架け橋に宿泊
141	山下佳音	2023年度参加者	再訪しゲストハウス架け橋に宿泊
142	宮本 圭	2023年度参加者	再訪しゲストハウス架け橋に宿泊
143	坂口 天音	2023年度参加者	再訪しゲストハウス架け橋に宿泊
144	藤本 百花	2023年度参加者	再訪しゲストハウス架け橋に宿泊
145	田中 慧	2023年度参加者	再訪しゲストハウス架け橋に宿泊
146	石橋るる子	2023年度参加者	ワーホリリピーターとして再訪
147	坂垣 凛	2023年度参加者	ワーホリリピーターとして再訪
148	西村 歩	2023年度参加者	再訪しゲストハウス架け橋に宿泊
149	増田ほのか	2023年度参加者	再訪しゲストハウス架け橋に宿泊
150	高岡空我	2023年度参加者	再訪しゲストハウス架け橋に宿泊
151	伊藤未結	2023年度参加者	再訪しゲストハウス架け橋に宿泊
152	名和 歩実	2023年度参加者	再訪しゲストハウス架け橋に宿泊
153	岡西未来	2023年度参加者	再訪しゲストハウス架け橋に宿泊
154	森本翔太	2023年度参加者	再訪しゲストハウス架け橋に宿泊
155	甲斐 景都	2023年度参加者	ワーホリリピーターとして再訪
156	田中藍紗	2023年度参加者	再訪し気仙沼を観光
157	田中藍紗	2023年度参加者	再訪し気仙沼を観光
158	一野優芽	2023年度参加者	ワーホリリピーターとして再訪
159	渡邊 素江	2023年度参加者	再訪しゲストハウス架け橋に宿泊
160	小林 莉子	2023年度参加者	再訪しゲストハウス架け橋に宿泊
161	板倉伶季和	2023年度参加者	再訪しゲストハウス架け橋に宿泊
162	福田ゆき	2023年度参加者	再訪しゲストハウス架け橋に宿泊
163	八幡 佳乃	2023年度参加者	再訪しゲストハウス架け橋に宿泊
164	藤本 百花	2023年度参加者	再訪しゲストハウス架け橋に宿泊
165	西岡 勇翔	2023年度参加者	再訪しゲストハウス架け橋に宿泊
166	金城杏奈	2023年度参加者	再訪しゲストハウス架け橋に宿泊
167	及川 康平	2023年度参加者	再訪しゲストハウス架け橋に宿泊
168	内山 洸士郎	2023年度参加者	再訪しゲストハウス架け橋に宿泊
169	岩崎 穂也	2023年度参加者	再訪しゲストハウス架け橋に宿泊
170	伊藤 小春	2023年度参加者	再訪し気仙沼を観光
171	佐藤 泉月	2023年度参加者	再訪しイベントを運営
172	谷崎 和奏	2023年度参加者	再訪しイベントを運営



2.1.4 企業連携

受入企業数	16社
受入企業一覧	<ul style="list-style-type: none"> ・株式会社おかえり ・まるオフィス ・旅館 明海荘 ・くるくる喫茶うつみ ・一般社団法人おりがみ ・けせんぬま子育てコレクティブインパクトプラットフォーム“コソダテノミカタ”事務局 ・一般社団法人 Ripple ・グランピング&キャンプ CAMELLIA 気仙沼大島* ・気仙沼地域戦略 ・Feel 農園 ・アサヤ株式会社* ・介援隊内湾シーパーク* ・プライダルハウス藤仙 ・蔵内之芽組 ・特定非営利活動法人ウィメンズアイ* ・気仙沼大島* ・合同会社 colere <p>*は今年度からの受入企業</p>

2.1.5 三年間の総括

3年間の移住者・関係人口

	2021年度	2022年度	2023年度	積算
エントリー数	190名	110名	114名	414名
参加者	88名	103名	102名	293名
再訪者(※)	30名	48名	49名	127名
移住者	5名	9名	9名	23名
再訪率	34.1%	46.6%	48.0%	43.3%
移住率	5.7%	8.7%	8.8%	7.8%

※ここでいう「再訪者」とは、当該年度に気仙沼市内に再訪した過去参加者（過年度生含む）を計上

課題の抽出・整理

（仕様書第7条(9) ふるさとワーキングホリデー及び移住・定住促進施策に関する課題の抽出・整理等）

ふるさとワーキングホリデーに関する相談等の業務を全般的に行っていくなかで、課題や問題点等を整理し、随時、甲に対して提言を行うとともに、移住・定住を促進する観点から、魅力あるまちづくりに寄与する活動を行う。

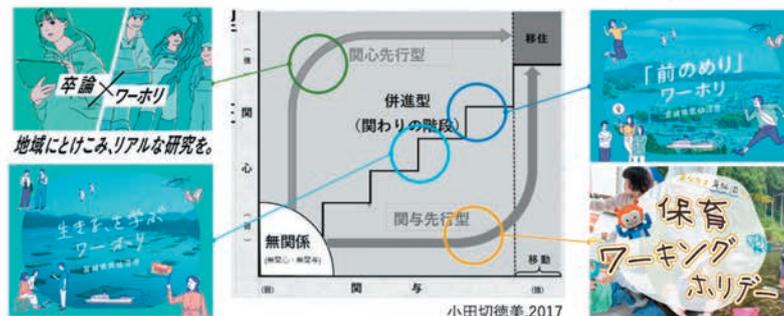
前提

本事業は関係人口創出を目指した事業です。関係人口とは「特定の地域に継続的に関心を持ち、関わるよそ者」とひろく定義されています。

「関係人口の社会学」（2021）の著者・田中輝美は、「人口減少は、地域再生の文脈に位置付ければ、これまで地域再生主体とらえられてきた地域住民の数が減少していくという意味でもある。しかも、量的な現象だけではなく、質的にも地域住民の主体性の欠如が報告され、量的、質的ともに困難な状況にある。[...]だからこそ、地域再生の主体になっていない、地域再生に当事者意識を持っていなかった人が主体性を獲得し、地域再生主体として形成されることに意義がある。」とし、最終的には地域再生の担い手になることが重要だとしています。

明治大の小田切（2017）は、関係人口は、「無関係」と「移住」を除く関心×関与フィールドのすべての領域の全てであり、関心と関与によって無関係から移住までのルートは異なるものだとし、関わりの階段を提唱しました。

「最終的には気仙沼の地域再生の担い手になること」「関係から地域での活躍までに様々なルートを取る」との2点を重要視し、事業運営を行ってきた3年間になります。



これまで、顧客の声を聞く指標として「顧客満足度 (CS)」が多くの企業で利用されてきました。

顧客満足度と NPS はどのように異なるのでしょうか。

大きく違うのは、「収益性との相関が認められるかどうか」という点です。

顧客満足度の調査では「満足度」を点数化し評価しますが、これはあくまでも現時点での評価を聞いているだけにすぎません。実際に、離反客のうち 80% が直前の顧客満足度調査で「満足している」と答えていたとする調査結果もあります。

対して、NPS はもともと「収益性と連動するロイヤルティ計測のための指標を探す」という発想から研究が始まっています。

顧客ロイヤルティと収益性の関係を解き明かすために試行錯誤を掲げた結果、推奨意向を質問し、顧客を「推奨者」「中立者」「批判者」にセグメント分けする手法が生まれました。NPS は「すすめたいと思いますか?」という質問を通して、「他者にすすめる」という未来の行動を点数化するため、今後の収益性と連動すると考えられています。

健康食品通販大手の EC サイトにおける調査を行った結果、NPS が高いサイトほど一年以上継続利用している顧客の割合が高い事がわかりました。

EmotionTech と日経 BP コンサルティング社の共同調査においても、NPS と国内販売台数の年平均成長率は非常に強い相関関係にあることが示されています。

このように、NPS は異なる業種でも売上や成長性と深く関連していることが見て取れます。

大手スーパーマーケットチェーンで買い物をした顧客の満足度と月額支払額の関係性についての調査では、通常の満足度質問に「心の満足」と「頭の満足」を測るための質問を加えています。

その結果、満足度の質問に満点の 5 点をつけた顧客のうち「頭で満足」している顧客の顧客の支払額は 144 ドルだったのに対し「心で満足」している顧客の支払額は月額 210 ドルと、「心の満足」を感じている顧客の方が支払額が高いことが明らかになりました。

心の満足、頭の満足とは、ギャラップ社のジョン・H・フレミングが 2005 年に提唱した概念です。

頭の満足とは、価格の安さや性能の良さなど、定量的に良いと判断した状態、つまり合理的に満足した状態のことを差します。

心の満足とは「性能はあまり高くないが自分に合っている」「ユーザーサポートが丁寧で心地よかった」など、感情的な満足のことです。

企業利益への貢献度が高い「心で満足している顧客」を可視化することができるのが、NPS 調査ということもできます。

NPS の活用はシティプロモーションの分野でも広がってきつつあります。

シティプロモーションの第一人者である河井孝仁 (2020) は、著書「関係人口創出で地域経済をうるおすシティプロモーション 2.0」の中で、「ライクヘルドが提起した NPS に用いられた推奨者・中立者・否定者の 3 区分と比較し、地域推奨意欲 (A) と地元産品購入意欲 (B) 及び、地域推奨意欲 (A) と地元就業意欲 (C) の関係を、より明確に説明できる」(p. 136) とし、修正 NPS と関係人口の定量化を目指す mGAP を提唱しました。



引用: <https://jichitai.works/article/details/1309>



本事業と
他市町村の
修正 NPS

2023 年度の参加者による事後アンケート (N=72) の結果、修正 NPS は以下の通りとなりました。

質問：気仙沼のワーホリを友人や知人に勧めたいと思いますか？ (10~1)

		人数	比率	結果
NPS	推奨者	54	0.75	65.28
	批判者	7	0.09	
修正NPS	推奨者	61	0.84	77.78
	批判者	5	0.06	

比較参考として、すでに修正 NPS スコアを測定している他自治体の結果は以下の通りです。

地域推奨量測定結果 (修正 NPS)

	気仙沼市	埼玉県北本市	兵庫県尼崎市	兵庫県尼崎市
対象	地域外	地域内	地域外	地域内
数値	77%	-57%	-42%	-28%
計測年度	2023 年度	2020 年度	2022 年度	2022 年度

但し、質問項目におけるお勧めするものが街全体ではなく「気仙沼のワーホリ」としていること、N 数の開きによる確度の差、気仙沼では 10⁰ではなく 10⁻¹として聞いたことなど、単純比較ができるものではありません。

なぜ関係を
行動として
ではなく、
意欲として
捉えるのか。

今年度までの 3 年間は、事業 KPI に再訪者率・移住者数という「行動」を扱ってきました。しかし、上記で分析し、また 2024 年度から弊法人と気仙沼市の間で結んだ新たな KPI は、行動ではなく「意欲」に注目したものになっています。

なぜ行動としてではなく、意欲として捉えようとする必要があるのか。

この問いに答えるために、前提の関係人口創出と地域再生について考えてみましょう。

定住者や地域外から地域再生(地域に関わる人々の持続的な幸せを実現する)のために求められる「関係」という行動は、常に何らかの形で地域に関わりたいという意欲を前提としているはず。

意欲なく偶発的に地域に「関係」したとしても、それは持続的な幸せの実現にはつながりにくいことは想像に易いでしょう。同様に、「関係」への意欲があったとしても、機会がなければ「関係」という行動には至れず、これも行動が最適でないことを示しています。

ここまでは、行動したことをもって初めて関係人口とするのではなく、機会があれば行動を起こす潜在的な可能性にも注目して関係人口を考えることの意義です。

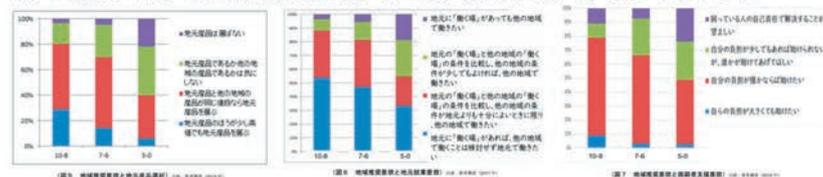
言い換えるなら、関係人口を現在ではなく未来に向かって定義するとも言えると思います。

それでは、具体的にどのような「意欲」が大切なのでしょうか。

前述の河井は、mGAP を測定する際、定住人口には、推奨意欲・参加意欲・感謝意欲の 3 つを修正 NPS で計算するとしています。一方、非定住者の意欲としては推奨意欲のみに注目しています。

河井は、これには、戦術的な側面があるとし「非定住者にとって、地域外から当該地域への参加は距離的・物理的に困難なことも多く、参加意欲の向上にはハードルがある。感謝意欲の対象である当該地域をよりよくしている人も、地域外からは見えにくい。結果として感謝意欲の高進は難しい。」と述べています。

つまり、ワーホリ参加者は、また参加したいという意欲は物理的距離により阻まれてしまい、気仙沼のために頑張ってくれている人への感謝意欲は精神的な距離も相まって生まれにくいのですが、他の人に気仙沼をオススメしたいという意欲は距離にあまり関係なく均等に起こるのです。以下の図は、地域推奨意欲×(地元産品選好、地元就業意欲、困窮者支援意欲)の結果ですが、どれも推奨意欲の強い人の方が弱い人に比べ高くなっております。



関係人口の
定量化(EBPM)
に向けて

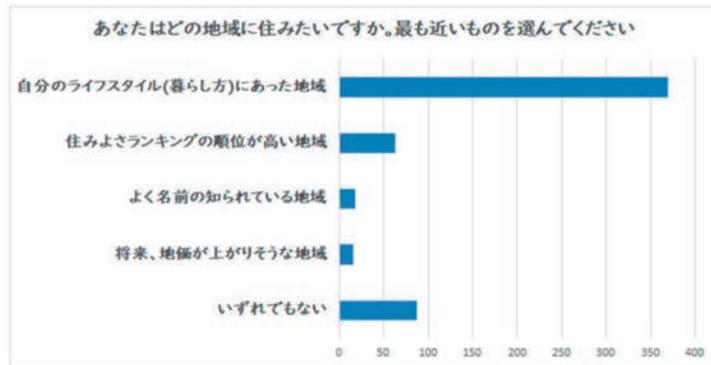
17年ぶりの社会増に転じた北本市では、移住定住ではなく、地域内の人を含めて関係人口と定義し、mGAPによる定期的な測定がこの成果に転じたと述べています。気仙沼のまちの良さを明確にするためにも、シティプロモーションの概念、市民向けのmGAPの測定には意義があると思います。

河井教授による **北本市シティプロモーション解説**



Cloud JAPAN では、今年度以降の KPI である「再訪意向」と共に、「地域推奨量」も測定してまいります。

最終的に移住を選択に置いた場合でも、他者評価やまちの知名度ではなく、「ライフスタイルにあった地域」であることを理解してもらえるため、引き続き本事業を進めてまいりますので、引き続きご指導賜りますようお願い申し上げます。



(図4 居住選好) 出典: 筆者調査 (2019年)



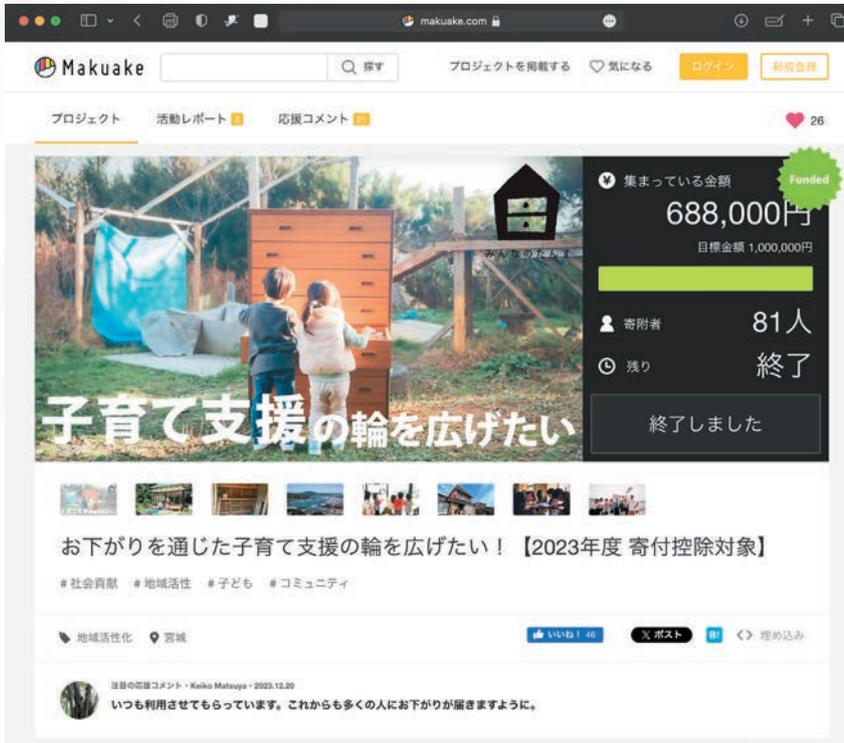
3. ソーシャルアントレプレナーの資金調達支援事業

3.1 みんなのたんす

Makuake で資金調達を行った。81 名の方より 688,000 円をご支援いただき、プロジェクトが進行している。

詳細は以下のリンクの通り。

https://www.makuake.com/project/wakuwaku_kesennuma/



#ResearchConf 2023 レポート

<https://note.com/researchconf/n/n378f0d9d8cef>

4. 地域で活動するソーシャルアントレプレナーに係る情報発信事業

本事業では、情報を取りまとめ発信することでソーシャルアントレプレナーを支援している。

4.1 講演活動

2023 年度は以下の通り、11 本の講演（オンライン含む）を行った。

日にち	場所	内容	概算参加人数
5月23日	九段下 and オンライン	政策デザイン	2,300人
8月23日	架け橋	市インターン	5人
9月25日	市役所	総務省視察	5人
10月13日	オンライン	にかほ市	6人
12月6日	架け橋	カネダイ	4人
1月5日	滋賀県立大学	イノベーション特論	30人

4.2 関係人口再考 - 令和5年度 気仙沼市ふるさとワーキングホリデー事業報告会 -

4.2.1. 開催趣旨

本企画は、気仙沼市ふるさとワーキングホリデーの関係者に経験を発表して頂き、ふるさとワーキングホリデーの実態を捉えると共に更なる広がりにつなげることを目的とする。

本報告会は、二部構成とし、第一部では、気仙沼ふるさとワーホリを通じた移住者、過去の参加者、受け入れ企業の皆様といった当事者による報告や発表を行う。第二部では、気仙沼市独自の取り組みとなる「研究ワーホリ」参加者による合同研究発表を行うことで、市内の課題について会場全体で考えていくと共に、地域再生の一端を担う理論的な解決策を導き出していく。

4.2.2. 実施日と開催場所

2024年3月8日（金）14時30分～18時00分

会場：まち・ひと・しごと交流プラザ 軽運動場

4.2.3. 報告会内容

以下の通り、2部制での開催とする。

■冒頭挨拶（気仙沼市 菅原市長、総務省地域自立応援課 椋田企画官）

■第一部（14:40~16:05）

- ・【15分】ふるさとワーキングホリデーと地域再生 - 気仙沼での過去三年間実例から -
- ・【20分】私と気仙沼と地域 - 過去参加者の声 -
- ・【20分】気仙沼と私と移住 - ワーホリからの移住者の声 -
- ・【20分】地域から見たふるさとワーキングホリデー - 受入企業の声 -
- ・【5分】講評：椋田 那津希 企画官（総務省地域自立応援課）

■休憩 & 名刺・意見交換会 & 感想共有ブース（16:05~16:20）

■第二部（16:20~18:00）

- ・【20分】東日本大震災における災害の伝承に関する研究 - 語り部自身の“語り”の変遷に
 着目して - (オンライン)
- ・【20分】気仙沼市における 漁業就業者数の減少要因とその対策 (オンライン)
- ・【5分】講評：椋田 那津希 企画官（総務省地域自立応援課）
- ・【20分】はやパパ～パパが地域での子育てを継続的にやりやすくなるための提案～
- ・【20分】気仙沼で、今を生きる - ふるさとワーキングホリデーを介した移住者をめぐる研究 -
- ・【5分】総括：菅原茂市長（気仙沼市）

■主催者による取材対応・質疑応答（18:00~18:30）

4.2.4. 成果

84名（うちオンライン15名）の参加



5. ソーシャルアントレプレナーの育成及び事業促進の教育支援事業

本事業では、事業運営団体に実際に所属し、教育的な視座からソーシャルアントレプレナーを支援している。

5.1 錦江町ゲストハウス Yorodde

今年度も錦江町ゲストハウス Yorodde を運営する株式会社燈の株主として弊法人が関わり、弊法人代表理事の田中惇敏が取締役として取締役会に定期的に参加した。

5.2 愛媛県伊予市ふるさとワーキングホリデー

伊予市地域おこし協力隊の上田沙耶氏をはじめとした伊予市の関係者の方とふるさとワーキングホリデーの政策提案を行った。結果として、令和6年度より「ふるさとワーキングホリデー社会実験業務」が開始され、弊法人がサポートし続ける予定となっている。



6. 運営組織

以下の通り、役員の役職と所属をまとめ、従業員の名簿をまとめる。

代表理事：田中 惇敏（慶應義塾大学 SFC 後期博士課程）

副代表理事：半沢 裕子（一般社団法人おりがみ代表理事）

理事：喜多 恒介（株式会社キタイエ代表取締役）

小出 悟（元 みしおね横丁 ワルンマホール 店長）

川嶋 奎（元 地域おこし協力隊 PADI ダイビングインストラクター）

監事：谷川 徹（元 九州大学教授 e.lab 代表）

従業員：高田美由紀、鈴木和海、竹中幸、坂根孝秀、今村ちひろ、佐藤慶治、高野真理亜、建石大貴、田中彩夏（2024年3月末現在）

7. 収支報告

7.1 2023年度活動計算書

活動計算書

2023年4月1日～2024年3月31日

(単位：円)

科目	金額	
I 経常収益		
1. 受取会費		
正会員受取会費		36,000
2. 受取寄附金		
受取寄付金		590,400
3. 受取助成金等		
受取公的補助金	1,005,688	
受取民間助成金	16,868,932	17,874,620
4. 事業収益		
自主事業収益	7,976,010	
受託事業収益	23,686,013	31,662,023
5. その他収益		
受取利息		2,408
経常収益計		50,165,451
II 経常費用		
1. 事業費		
(1) 人件費		
法定福利費	3,873,990	
給与手当	14,536,502	
人件費計	18,410,492	
(2) その他経費		
旅費交通費	3,348,411	
水道光熱費	1,267,369	
通信運搬費	789,612	
消耗品費	1,464,637	
修繕費	1,200	
賃借料	350,000	
業務委託費	4,011,959	
謝金	466,000	
支払手数料	107,771	
地代家賃	1,382,400	
印刷製本費	7,590	
租税公課	1,250	
保険料	235,454	
諸会費	49,000	
売上原価	1,085,694	
支払助成金	14,068,392	
衛生管理費	334,859	
その他経費計	28,971,598	
事業費計		47,382,090
2. 管理費		
(1) 人件費		
給料手当	144,752	
福利厚生費	9,720	
人件費計	154,472	
(2) その他経費		
通信運搬費	136,003	
消耗品費	65,954	
業務委託費	33,000	
支払手数料	6,625	
地代家賃	726,410	
その他経費計	967,992	
管理費計		1,122,464
経常費用計		48,504,554
当期経常増減額		1,660,897
税引前当期正味財産増減額		1,660,897
法人税、住民税及び事業税		300,500
当期正味財産増減額		1,360,397
前期繰越正味財産額		1,026,474
次期繰越正味財産額		2,386,871



7.2 事業別損益の状況

(単位：円)

科目	ソーシャル アントレ プレナーおよ びその関係 者が集う場 づくり支援 事業	ソーシャル アントレ プレナーおよ びその関係 者が集う場 運営事業	ソーシ ャルア ントレ プレナ ーの資 金調達 支援事 業	地域で活 動するソ ーシャル アントレ プレナ ーにかかわ る情報発 信事業	ソーシャ ルアント レプレナ ーおよび その関係 者の育成 および事 業促進の ための教 育支援事 業	事業部門合 計	管理部門	合計
I 経常収益								
1. 受取会費	0	0	0	0	0	0	36,000	36,000
2. 受取寄附金	0	20,000	550,400	0	0	570,400	20,000	590,400
3. 受取助成金等	16,863,604	1,011,016	0	0	0	17,874,620	0	17,874,620
4. 事業収益	1,245,000	28,688,523	0	1,728,500	0	31,662,023	0	31,662,023
5. その他収益	24	0	0	0	0	24	2,384	2,408
経常収益計	18,108,628	29,719,539	550,400	1,728,500	0	50,107,067	58,384	50,165,451
II 経常費用								
(1)人件費								
法定福利費	0	3,873,990	0	0	0	3,873,990	0	3,873,990
給与手当	0	14,536,502	0	0	0	14,536,502	0	14,536,502
給料手当	0	0	0	0	0	0	144,752	144,752
福利厚生費	0	0	0	0	0	0	9,720	9,720
人件費計	0	18,410,492	0	0	0	18,410,492	154,472	18,564,964
(2)その他経費								
福利厚生費	0	0	0	0	0	0	0	0
旅費交通費	1,437,605	1,657,096	0	103,405	150,305	3,348,411	0	3,348,411
水道光熱費	846,445	420,924	0	0	0	1,267,369	0	1,267,369
通信運搬費	270,472	519,140	0	0	0	789,612	136,003	925,615
消耗品費	1,153,447	310,860	330	0	0	1,464,637	65,954	1,530,591
修繕費	0	1,200	0	0	0	1,200	0	1,200
賃借料	0	350,000	0	0	0	350,000	0	350,000
業務委託費	2,484,452	1,527,507	0	0	0	4,011,959	33,000	4,044,959
謝金	336,000	130,000	0	0	0	466,000	0	466,000
支払手数料	48,499	59,272	0	0	0	107,771	6,625	114,396
地代家賃	1,020,000	362,400	0	0	0	1,382,400	726,410	2,108,810
印刷製本費	0	7,590	0	0	0	7,590	0	7,590
租税公課	1,050	200	0	0	0	1,250	0	1,250
保険料	74,485	160,969	0	0	0	235,454	0	235,454
諸会費	31,000	18,000	0	0	0	49,000	0	49,000
売上原価	1,047	1,084,647	0	0	0	1,085,694	0	1,085,694
支払助成金	14,068,392	0	0	0	0	14,068,392	0	14,068,392
衛生管理費	154,218	180,641	0	0	0	334,859	0	334,859
受取公的補助 金	0	0	0	0	0	0	0	0
その他経費計	21,927,112	6,790,446	330	103,405	150,305	28,971,598	967,992	29,939,590
経常費用計	21,927,112	25,200,938	330	103,405	150,305	47,382,090	1,122,464	48,504,554
当期経常増減額	-3,818,484	4,518,601	550,070	1,625,095	-150,305	2,724,977	-1,064,080	1,660,897



8. 終わりに

ボランティアという関係人口

震災から13年を迎える2024年3月11日。今年は、娘が保育園に行っていたので久しぶりに敷地から出て、お伊勢浜の海まで祈りに行くことができました。

14時46分を告げるサイレンが鳴っても、変わらない海のうねり。

波の音を耳に聴きながら、非日常を扱うワーホリ事務局の一員として、気仙沼に住む移住者として、日常の尊さを感じたところです。

毎日が無事に続くことに感謝し、大切な人たちが近くにいることに感謝し、学びのある環境に感謝して、生きていきたいと思いました。

帰ってFacebookを見ると、震災当時のボランティア仲間がこの地に想いを馳せてくれている投稿をたくさん拝見できました。

そのときに思ったのは、やっぱりボランティアは関係人口だったんだなということ。

2011年当時は関係人口という言葉はありませんでしたが、私たちボランティア派遣団体が大事にしていたことを現在の関係人口研究者が綴ってくれています。

先日開催した関係人口再考をテーマにした報告会には84名の皆様、11自治体の皆様にご参加くださいました。

気仙沼で13年前から続いている関係人口(=ボランティア)創出のノウハウが、今後の他地域の再生に寄与できると心から嬉しく思います。

逆説的にいうと、発災後のボランティア受け入れの際、最初から関係人口として捉える受け入れが大事だとなります。

都市計画学会東北支部大会にて関係人口について議論させてもらいましたが、ボランティア受入がうまくいっていない能登の被災地でも一層私たちが活動していく必要を感じました。

能登においても復興の先を見据えた、息の長い支援をすることが私たちの使命だと思っています。

震災から14年目の気仙沼、震災から3ヶ月目の能登。

どちらもまだまだ皆様の力が必要です。

私は、娘の生まれた町(つまり出生地として死ぬまで戸籍から消せない)となった気仙沼、これまで13年間の学びを活かせる能登をはじめとする全国の地方のために全力です。

活動にあたっては、皆様にご協力いただくことも多くあると思いますので引き続きよろしくお願ひ申し上げます。

認定特定非営利活動法人 Cloud JAPAN

代表理事 田中 惇敏



Cloud JAPAN

